

京都府+京都大学こころの未来研究センター共同企画シンポジウム 2011年11月23日 「ワザとこころ～葵祭から読み解く」挨拶文

1、はじめに

「こころの未来研究」センターでは、「こころ (kokoro)」に対して脳科学から宗教学までのあらゆる研究分野や研究方法を通してアプローチしていますが、その中の一つの研究プロジェクトが「こころとモノをつなぐワザの研究」プロジェクトです。

この研究プロジェクトにおいて、わたしたちは「こころ」に迫る観点として、「ワザ」に注目しました。

「ワザ (技・業・術)」とは、人間が編み出し、伝承し、改変を加えてきたさまざまな技法です。その技法には、呼吸法や瞑想法などを含む身体技法や各種の芸能・芸術の技法やコミュニケーション技術など、実に多様で豊かな種類があります。

そこで、わたしたちは、「ワザはこころとモノとをつなぐ媒介者である」という観点から「ワザ」に着目し、人間のこころと人間が作り上げてきた物や道具や観念世界などとの相互関係を具体的に吟味しています。わたしたちは、「ワザ」という概念の吟味とその諸相を広くリサーチし、フィールドワークも試みています。

通常、「物」は目に見えますが、「こころ」は目に見えないものとされます。けれども、「こころ」はさまざまな「ワザ」を通して、「物」の世界に「形」を与え、人間世界に広がりや深みをもたらしました。

古くは、わが国では神を呼び出し、交わり、生命力を高め強化する技法を「ワザヲギ」と呼びました。「ワザ」は、諸種の儀礼・芸能・芸術・技術・学芸・ライフスタイルを含み、人間はこのワザの力によって豊かな文化を形成し、生の充実をはかろうとしてきたといえます。

ワザには、狩猟・漁労、農耕、マタギ、大工、石工、鋳物などの生産加工技術、修験道、芸能者、禅やヨーガや気功などの身体技法、身体・音楽・造形に関わる芸術表現、人間関係の諸技術など、実に豊富な領域と事例があり、しかも奥が深く、全容を整理しまとめるのは容易ではありません。

そうしたワザ研究の広がりの中で、わたしたちはこの3年間、テキスト研究 (文献・思想研究) としては、「世阿弥研究会」を月2回開催して、『風姿花伝』『花鏡』『至花道』『申楽談義』を読み解いてき、今は世阿弥著の『能作書 (三道)』を讀解しています。この能における「ワザ」の考察は極めて具体的で汎用性もあって面白いものです。

これに関連して、平安京・京都および周辺地域の神社仏閣など伝統文化の中に保持された儀礼や芸能・芸術や身体技法や修行 (禅・ヨーガ・気功・瞑想・滝行) などの研究も行っています。ゆくゆくは、fMRIなどの測定装置を用いて修行者やパフォーマーの脳波・脳内血流・セロトニン濃度など生理学的実験研究も試み、こころとからだの生き方との接点を探ってみたいとも考えています。

2、11月23日 (水)・24日 (木) 「ワザとこころ」2つのシンポジウムの背景と趣旨概要

さて、これまで京都府との共同企画で、2008年11月に「平安京のコスモロジー」 (創元社より2010年に『平安京のコスモロジー』として出版)、2009年11月に「遠野物語と古典——物語の発生する場所とこころ」 (創元社より2011年に『遠野物語と源氏物語——物語の発生する場所とこころ』として出版)、2010年11月に「平安京と祭りと芸能」 (創元社より2012年に出版予定) と3回にわたるシンポジウムを開催し、歴史都市・京都に伝わる伝統文化を世界観・物語・芸能などの

観点から考察・論議してまいりました。

そして今回、京都の伝統文化の根幹をなす古代からの祭り「葵祭（賀茂祭）」を通して、そこに内在する「ワザとところ」を読み解いてみるという企画をいたしました。その際、単に京都の伝統文化をそれ自体として分析するばかりではなく、沖縄の「神の島」と呼ばれた久高島の伝統的祭祀などと比較することによって、より深く広く、「葵祭」の「ワザとところ」のありどころを確認してみたいと考えました。

その水先案内人として最適の方が、本研究プロジェクトの連携研究員の一人・大重潤一郎監督です。というのも、大重監督は、京都の祭りと沖縄の祭りの双方を映像に収めて来られたからです。

大重氏はハイビジョン方法が始まった頃に「京都歳時記」というハイビジョン番組の監督をし、「葵祭」と「祇園祭」について各60分ほどの番組を作っています。今回は、その際の放送を元に、22分の新編集の「葵祭」の映像を作成していただき、みなさまに初公開いたします。

同時に、大重監督は、2000年より沖縄に10年以上住み着いて、久高島の12年間の軌跡を『久高オデッセイ第一部 結章』と『久高オデッセイ第二部 生章』として制作してきました。明日のシンポジウムでその『久高オデッセイ第二部 生章』を上映します。

そのような仕事をしてきた大重監督に、京都の祭りと沖縄・久高島の祭りの比較の話をしていただき、その後で、「葵祭」を神職として実際に担ってこられた下鴨神社（賀茂御祖神社）禰宜の嵯峨井建氏と上賀茂神社（賀茂別雷神社）権禰宜の村松晃男氏に、両社の「葵祭」の「ワザとところ」の特質などについて話をさせていただきます。特に、前者では神饌、後者では走り馬・競べ馬に焦点を当てていただきます。

そして最後に、京都大学大学院教育学研究科のやまだようこ教授（発達心理学）に京都の伝統文化に伝わる「ワザとところ」を沖縄のコスモロジーとの比較も含めて話をさせていただきます、それらの講演をもとに討議してまいります。

本日と明日のシンポジウム「沖縄・久高島のワザとところ～その過去と現在」は、互いに密接に連動しておりますので、お時間がありましたら、明日もまたご来場いただければ幸いです。

2011年11月23日 ころの未来研究センター 企画・司会担当 鎌田東二

京都府との共同企画：2011年11月23日（水・祝日）13時～17時（受付開始 12：30～）

場所：稲盛財団記念館3階大会議室

テーマ：「ワザとところ～葵祭から読み解く」

第一部 映像上映と講演

趣旨説明（10分）鎌田東二

上映 『京都歳時記 葵祭』（30分）

講演「京の祭りと沖縄の祭りを比較して」（20分）

大重潤一郎（映画監督、NPO法人沖縄映像文化研究所理事長）

第二部 ミニ講演&パネルディスカッション

「下鴨神社（賀茂御祖神社）の葵祭と神饌」（30分）

・嵯峨井建（賀茂御祖神社禰宜・神社祭祀研究・京都大学非常勤講師）

「上賀茂神社（賀茂別雷神社）の葵祭と競馬と葵」（30分）

・村松晃男（賀茂別雷神社権禰宜・NPO法人葵プロジェクト理事・事務局長）

「京の祭りのワザとところを探る」

・やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科教授・発達心理学）（30分）

司会 鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター・宗教哲学・民俗学）

京都府/京都大学
こころの未来研究センター
共同企画シンポジウム

日時 2011年11月23日(水・祝日)
13時～17時(受付開始 12:30～)

場所 京都大学稲盛財団記念館3階大会議室
《京都府左京区吉田下阿達町46-1(荒神橋東詰)》
※会場地図をダウンロード
アドレスURL: <http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/kyoto/kyoto.html>

定員 180名(申込による先着順)
※定員に達した場合は、抽選となります。

【第一部】
上映『京都歳時記 葵祭』(30分)
講演「京の祭りと沖縄の祭りを比較して」
大重潤一郎
《映画監督、NPO法人沖縄映像文化研究所理事長、
関西テレビ放送局 番組「久高オデッセイ」監修》

【第二部】
ミニ講演とパネルディスカッション
「下鴨神社(賀茂御祖神社)の葵祭と神饌」
嵯峨井建
《賀茂御祖神社禰宜、神社祭祀研究・京都大学非常勤講師、
関西テレビ放送局 番組「久高オデッセイ」監修》
「上賀茂神社(賀茂別雷神社)の葵祭と競馬と葵」
村松晃男
《賀茂別雷神社権禰宜、NPO法人葵プロジェクト理事・事務局長》
「京の祭りのワザとところを探る」
やまだようこ
《京都大学大学院教育学研究科教授・発達心理学》

司会 鎌田東二
《京都大学こころの未来研究センター・教授・宗教哲学・民俗学》

申込方法
EメールまたはFAXのいずれかでお申込みください。お名前が「興学」シンポジウム、申込・申し込み、必要事項を
記入の上、ご返信ください。
必要事項：①電話等申込み(お名前)がご返信用の連絡先(メールアドレスは必須はFAX専用)
申込料を支払った後、参加費を送付いたしますので、返信用メールアドレス・FAX番号は明記をお願いします。
申込締切：2011年11月18日(金)

連絡先/申込先：京都大学こころの未来研究センター・リニアエニアイス
FAX: 075-753-9680
E-mail: kokoro-event@med.kyoto-u.ac.jp
URL: <http://kokoro-kyoto-u.ac.jp/index.html>

主催：京都府/京都大学こころの未来研究センター
後援：古典の日振興委員会

古典の日

11月24日（木）の関連シンポジウム「沖縄・久高島のワザとところ」

第3回こころ観+Waza学研究会+負の感情研究会合同特別シンポジウム

日時：11月24日（木）10時30分～12時10分/13時～17時

場所：京都大学稲盛財団記念館3階大会議室

テーマ「沖縄・久高島のワザとところ～その過去と現在」

第一部 10時30分～12時10分 映画上映：大重潤一郎監督作品

「久高オデッセイ 第二部 生章」(70分)「水の心」(30分)

第二部 13時～17時 シンポジウム

趣旨説明（10分）鎌田東二

パネリスト：

・大重潤一郎（『久高オデッセイ』映画監督）

「久高島のワザとところ」（30分）

・須藤義人（沖縄大学専任講師・映像民俗学）

「沖縄の民俗文化・祭祀芸能文化におけるワザの伝承について」（40分）

・坂本清治（久高島留学センター代表）

「久高島山村留学と負の感情の乗り越えと成長」（40分）

指定討論者 やまだようこ（京都大学教育学研究科教授・発達心理学）（20分）

パネル・ディスカッション+質疑応答

司会進行 鎌田東二

京都大学こころの未来研究センター

シンポジウム「そのワザとところ」

そのワザとところの過去と現在の

日時：2011年11月24日(木) 10時30分～17時

場所：京都大学稲盛財団記念館3階大会議室
京都府左京区吉田下阿達町46(荒神橋東詰)

定員：150名(申込不要)

主催：京都大学こころの未来研究センター(こころ観+Waza学+負の感情研究会)
共催：京都府

関連文献：

須藤義人『久高オデッセイ——遙かなる記録の旅』晃洋書房、2011年

やまだようこ編『この世とあの世のイメージ—描画のフォーク心理学』新曜社、2010年

やまだようこ『ことばの前のことば—うたうコミュニケーション』（やまだようこ著作集1）新曜社、2010年

河合俊雄・鎌田東二『京都「癒しの道」案内』（朝日新書、朝日新聞出版、2008年

鎌田東二編『遠野物語と源氏物語——物語の発生する場所とところ』創元社、2011年

鎌田東二『現代神道論——霊性と生態智の探究』春秋社、2011年

鎌田東二編『平安京のコスモロジー』創元社、2010年

鎌田東二・近藤高弘『火・水（KAMI）——新しい死生学への挑戦』晃洋書房、2010年

鎌田東二編『モノ学の冒険』創元社、2009年

鎌田東二編『モノ学・感覚価値論』晃洋書房、2010年

鎌田東二『聖地感覚』角川学芸出版、2008年

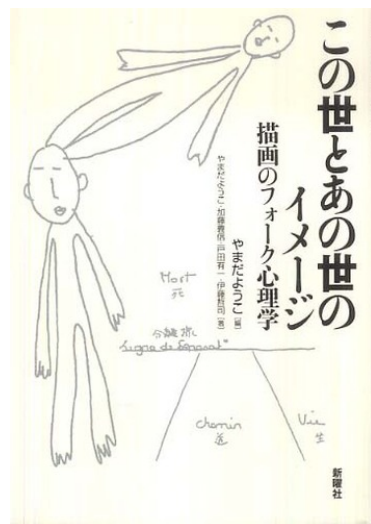
鎌田東二『神と仏の出逢う国』角川選書、角川学芸出版、2009年

鎌田東二『超訳古事記』ミシマ社、2009年

上記文献の中で、須藤義人氏の著作『久高オデッセイ』には、大重潤一郎氏の活動と思想が詳しく描かれています。

また、やまだようこ氏の編著『あの世とこの世のイメージ』は、今回の講演と深く結びついている研究書です。ともに、ご参照ください。

また、河合俊雄・鎌田東二共著の『京都「癒しの道」案内』「第四章 平安京のあけぼのの地—御蔭神社」も本シンポジウムのテーマと密接に関わっていますのでご参照いただければ幸甚です。）



「ワザとこころ—葵祭から読み解く」

第一部 開会あいさつ

京都大学こころの未来の研究センター 鎌田東二

皆さまこんにちは。今日は昔の言い方では、新嘗祭（にいなめのまつり、しんじょうさい）、いまは国民の祝日で勤労感謝の日という、めでたい祝いの日であります。その日にふさわしいテーマで、夕刻5時までシンポジウムを開催させていただきます。

シンポジウムを開催するに当たりまして、法螺貝を奉奏するところから始めさせていただきます。というのも、今日の葵祭のシンポジウムは、明日の沖縄の久高島のシンポジウムとつながっているのですが、法螺貝は通称琉球巻貝と言い、沖縄辺りで捕れる法螺貝をこちらに運んで、仏教および修験道などのさまざまな祭事で用います。

（法螺貝奉奏）

今年は、大変大きい災害が二つ重なりました。一つは、3月11日に東日本大震災が起こり、大津波によって、沿岸部500キロにわたる被害、またさらに、原子力発電所の事故によって、その被害がまだ収束していないという事態に見舞われております。

そして9月3日ごろには、沖縄、九州、四国、紀伊半島と台風12号がやってまいりました。その台風12号によって、紀伊半島の深層崩壊をした山崩れが、大小合わせて160カ所もありました。これも大変な被害であります。

東日本大震災と西日本の大水害という大きい二つの災害に、東西から挟み撃ちになったという事態の中で、日本の国の在り方、国民生活の在り方、さまざまな在り方や生き方が根本のところから問われている現状があります。

そういう中で、私たちこころの未来研究センターは、今日明日の二日間にわたり、京都府と共同企画で二つの連続シンポジウムを開催致します。その大きなテーマは、「ワザとこころ」です。そして今日のテーマは、「葵祭からワザとこころを考える」です。明日は、「沖縄・久高島からワザとこころを考える」です。今日は葵祭を中心にしながら、明日は沖縄・久高島を中心にしながら「ワザとこころ」に迫っていくというシンポジウムです。

今日の流れについて、あるいは、開催の趣旨について説明させていただきます。お手元の資料、私がまとめた今日のシンポジウムの概要がございますのでご覧ください。

こころの未来研究センターでは約30ぐらいの研究プロジェクトが進められています。その研究プロジェクトの中で、私が担当しているものが五つあります。その中の一つが、「ワザ学」と通称しているので、「こころとモノをつなぐワザの研究」というのが正式名称で、略称として「ワザ学」研究と称しています。

「ワザ」というのは、さまざまな技術、スキル、アート、メチェ、テクノロジーなどの意味も含まれますけれども、『古事記』の中に記されている古語で「ワザヲギ」と言うと、神の魂をこちら側に招く技術を指します。

その日本語の古い言葉の中にある「ワザ」という言葉をあえて使いながら、それぞれの伝統文化の中にある、日本なら日本の伝統文化の中にある生活の技法、ワザというものがいったいどのようなものであり、そこにどのような心や世界観、生命観、人生観というものが込められているのか、それを掘り起こすことによって、それぞれの地域、文化の在り方を再検証していこうという趣旨で「ワザ学研究」プロジェクトを推進しています。

今日、登壇していただく大重潤一郎氏は、そのワザ学研究プロジェクトの連携研究員として加わってくれておりますし、明日発表してくれます。沖縄大学専任講師で映像民俗学者の須藤義人氏も同じくこの「ワザ学研究」プロジェクトの連携研究員です。

京都府との提携の事業としては、今日が4回目になります。過去に3回すでに行ってまいりまし

た。京都府との共同企画の一連のシンポジウムは、2008年11月に第1回目を、稲盛ホールで「平安京のコスモロジー」と銘打って行いました。みなさまもご存知の『陰陽師』の漫画家・岡野玲子も登場します。そのときの記録が『平安京のコスモロジー』という題で2009年に創元社から出版されています。

その後、2009年11月、第2回目の催しとして、「遠野物語と古典一物語の発生する場所とところ」というシンポジウムを行いました。このときは、宗教学者の山折哲雄先生に基調講演者として発題していただきました。それがやはり創元社より2011年11月、本当についにこの前に出来上がりました。『遠野物語と源氏物語一物語の発生する場所とところ』と題して、やはり同じ創元社より出版しております。

そして去年、2010年11月に、第3回目の催しとして、御所の西北にある金剛能楽堂で、「平安京と祭りと芸能」と題してシンポジウムを行いました、そのときの基調講演者が上田正昭先生でした。これはまだ本になっておりませんが、来年（2012年）には出版する予定です。

そして、今日4回目が、「葵祭から読み解くワザとところ」というテーマとなります。お二人の神職として、実際に両賀茂神社にお仕えする身で、またそこで深く学ばれている嵯峨井建禰宜さんと村松晃男権禰宜さんから、具体的に葵祭というのは、いったいどのような祭りであるかについて、詳しく説明していただきます。

ご承知のように、京都という場所を古くから開拓していった重要な一族が賀茂一族です。そして、もう一つの一族が秦一族です。賀茂氏は東、秦氏は西を拠点とします。そして、鴨川の周辺勢力というのは、この賀茂一族が中心になって栄えていきます。そこで、糺の森のところに、下鴨さんこと賀茂御祖神社、さらに上流にさかのぼって上賀茂さんこと賀茂別雷神社が鎮座します。この二つの社が賀茂川流域に創建されることになります。

そして、その祭りが京都を代表する祭りとして勅祭となります。三つの勅祭とは、石清水八幡宮と春日大社と両賀茂神社の祭りで、中でも賀茂祭がその筆頭となります。伊勢神宮に次ぐ、日本で第2位の格式のあるお宮が両賀茂神社ということになるわけです。そして、賀茂神社の最も重要な神秘なる祭りが賀茂祭で、これが通称、「葵祭」と呼ばれる、5月に行われる祭りです。

その葵祭（賀茂祭）に伝わっているさまざまワザを、一つは神饌、神様にお供えする料理、お供えものから探り、もう一つは、競馬、走り馬から探ろうというのが今回の企画主旨です。葵祭になぜ馬がそれほど重要な意味を持つものとして登場してくるのか。また葵祭で用いられる葵そのものにはいったいどのような意味があり、その現状、いま葵がどのような植生状況になっているのかについても話をさせていただきます。

さらにもう一つ、ただ葵祭を日本を代表する祭りとしてそのまま取り上げるのではなく、沖縄の祭りと比較した場合に、その特質がどのように立体的に見えてくるか。これを大重潤一郎氏とやまだようこ氏に問題提起していただくことにしました。

といいますのも、大重氏は『京都歳時記』という、関西放送がハイビジョンとして放送を始めた最初のころに、二つのテレビ番組をつくりました。『京都歳時記 葵祭』と『京都歳時記 祇園祭』です。京都を代表する2大祭りを1時間ほどの映像に収めて、それを放送しました。

今日は、大重監督に無理を言って、その60分の映像を今回のシンポジウムのために22分に省略してもらいました。それを最初に見ていただき、葵祭の概要についてトータルイメージを持ってもらってから、大重監督に沖縄、とりわけ久高島の祭りとの比較という観点から問題提起をしていただくことを最初の講演と致します。大重さんは、沖縄の久高島の祭りや島の生活を12年間追いかけております。

そして、お二人の神職さん、下鴨神社の嵯峨井建さんと上賀茂神社の村松晃男さんに、それぞれ両賀茂神社の葵祭と神饌と競べ馬について話をしていただき、そして、やまだようこ氏に、そこに含まれている世界観、コスモロジー、いのち感について話をさせていただきます。

第1部、映画の上映と大重潤一郎氏の話が終わったときに、1回10分間の休憩を持ちます。それ

から、第2部、3人のミニ講演が終わった段階で、もう1回10分間の休憩を持ちます。それから最後がパネルディスカッションにして、その4名と、私が司会ですから、入れると5名がディスカッションをして、最後の10分ほどを質疑応答の時間に充てたいと思います。そのような流れで、今日夕方5時までの時間、充実した催しにしていきたいと思いますので、ご協力よろしく願いいたします。

それでは、まず、映像の上映に移ります。『京都歳時記』、20年ほど前に関西テレビで放送されたものの短縮版を、これから皆さんにご覧いただきます。

『京都歳時記 葵祭』（特別短縮篇、DVD上映）

○鎌田 いかがだったでしょうか。これが、『京都歳時記 葵祭』の短縮版であります。それを見たと、これを監督しました大重潤一郎氏に基調講演を約30分していただきます。

大重氏のプロフィールについては、「大重潤一郎のフィルモロジー、気配の魔術師と呼ばれる映画監督」（本報告書42～46頁）という文章がありますので、ご参照いただければと思います。

では、大重監督よろしくお祈りします。大重さんは脳内出血で半身不随となる中で、沖縄で映画を撮り続けていますので、今日は車いすのまま話をさせていただきます。

基調講演「京の祭りと沖縄の祭りを比較して」

NPO 法人沖縄映像文化研究所理事長・映画監督 大重潤一郎

初めまして、大重潤一郎と申します。私は右半身が不随で、ようやく言葉がここまで、7、8年かかりまして帰ってきたので、「それは大したことだ」とおっしゃる方が多いのです。そういうことで、ちょっとご勘弁ください。沖縄からまいりました。

これをつくったのは、もう20年ほど前ですが、いまどっぷり沖縄に10年、祭りにずっと関わっております。そういう中で、葵祭の映像をご覧にいただけたかと、今日のご神職の方が二人、じっくり話をして頂きますので、私は京都と沖縄という関係でお話をさせていただければと思います。

その前に、私は実を言いますと鹿児島生まれです。九州の最南の地で生を受けまして、それで仕事で、京都はよくいろいろ撮影させてもらいました。その中で賀茂祭（葵祭）に対して、いまもって生々しく心にあることは、やはり、御蔭神社、神の山と書く神山、そこに神様をお迎えに行く。あのときの厳粛さは、いまでも身が震えるようです。

やはり、京都というところは、類いまれに、周りの自然が見事です。結局、周りの自然があつて人が居るわけです。人は自然を見ながら生きている。

そこで思うに、やはりこういう言葉を40年使いたかったのですが、「アミニズム」。かつて高度成長時代は、そんなことを言うと誰も相手にしてくれませんでした。いま、ようやく震災が起こったりいろいろして、アミニズムという言葉が少し受け入れられるようになった。そのことを非常に喜んでおります。

それと、5月という葵祭のころは、「薫風」とよく言いますが、風が光っているのです、きらきらと。ぎらぎらという暑い熱ではなくて、光なのです。走るように、ころころたくさんあることが、ものすごく印象に残ります。

それと、賀茂一族というのはもちろん、秦一族と同じように渡来人のことでしょうが、だけど、アミニズムというものが、やはり縄文古来、これはもっと旧石器のころからあったのだらうと思います。そういう土台が長く何万年もあつて、それでいまに受け継がれていることを考えますと、やはり京都がこの自然をずっと皆さんが大事にされて、いろいろな祭り、あるいは、いろいろな産業まで、あらゆることが存続していることに感動を覚えます。

祭りについては、いまの葵祭の朝廷が主催するものもあり、祇園祭に関しては、いろいろな経緯を経て、現在は町衆が中心になっておられる。町衆の勢いもすごいです。撮影をしたときは、ちょうど国会議員選挙だったのです。それでスピーカーでわあわあと言うわけです。そうしたら、町衆が「スピーカーのアナウンスをやめろ。俺たちは千年前からやっていたぞ。いまだきのものがじゃまするな」ということで、これも大したものだなと思いました。

葵祭に関して、いわゆる懸装品^{けいそうひん}、あれも、もう世界中から集まっています。私がこれに関わるのは初めて、日本でも最初だったのです。それで、懸装品をいろいろと撮影していましたが、例えば、織物、繊維が動物繊維であるか、植物繊維であるかというところまで分かるのです。

皆さん、町衆の方はびっくりされていました。「えっ、そこまで見るのですか」と。だから、いままで、世界中から、日本中から集めた懸装品、財産というものは、本当に生きた歴史、そこで息づいているということからすると、これは本当に尊いものだなという感じがしています。

何と言っても京都は、「歳時記」の基準点です。京都を基準にして、日本の歳時記が編まれる。これは大佛次郎さんの言葉ですが、「古きもののそばで常に革新、優れたものがそこで起こる」とあります。まさに京都大学のノーベル賞から始まり、いろいろなことを考えますと、古いことに一番革新的なものがずっと続いているという、正に生きた証拠というか、そういうことが判ります。

いま地下鉄の丸太町駅から、これで半分来たのですが、ずっと沖縄ばかりに居ますと、街並みが、もうにおいが、においはないのですが、ぷんぷん京都が香ってまいりました。久々に京都の温泉に漬かっているというような気分で、そういうふうなことでここまでまいりました。

そういうところに、お地蔵さんが各所にある。あの街の姿というのは、本当にほかにないと思います。類いまれなことだと思います。

私は鹿児島ですけども、鹿児島にも祇園祭があるのです。祇園祭は日本中にあります。結局、ここから全部行っているのです。そういう日本全国、京都の文化的遺伝子というものは、やはりあまねくあるわけです。

ただ、この後、沖縄のことと結びますが、その前に、ぜひ皆さんにご紹介したい言葉というか、本があります。屋久島に長く住んでおられました山尾三省という、詩人がおられました。もう亡くなりましたが、われわれ鎌田さんと一緒にやっている NPO 法人東京自由大学にとっても、長らく顧問をしてくださいました大変大事な先達です。

その方の晩年の本の中に、『アミニズムという希望』（野草社、2000）というタイトルの本があります。いま、これだけ世の中が分からないような時代になってきている。いまから、アミニズムという希望があるのかと、貴重な光を見るような気が致しました。

時間も少ないですから、かいつまんで話しますと、競べ馬に関しては、実は沖縄、鹿児島で、私は小さいころからずっと見ていました。あちらの競べ馬は全然違います。特に沖縄はかなり違います。踊るのです、馬が。走るのではないのです。沖縄舞踊で手をこねる、なよりのしぐさがありますが、馬がそれを競うのです。私の鹿児島でも、霧島神宮でやる初午祭。これはしゃんしゃん鈴に合わせ、踊るのです。もう沢山の飾りを付けて。

いわゆる地球というのは、丸いのは見事だと思うのですが、風土も祭りも少しずつ変わっていくわけです。気候風土が変わっていけば、植生も、何もかにもが変わっていくわけです。そうすると、ある一点が全部通用するわけではない。少しずつスライドしながら、ぐるっと回って行って、地球を戻ってくるころには、また元へ戻ってくる。そんなふうに少しずつ重なっているのです。そういうふうにある。

つまり、地方、辺境というか、周辺、周りのへり、エッジといいますが、日本という国から見てそうではありますが、それは大切ではない。

例えば、京都を中心とした場合に、いま東北という、あれは皆さんがもうはっきり自覚を持っているのは「蝦夷^{えみし}」と呼ばれていた。こちら鹿児島は「隼人^{はやと}」と呼ばれている。京都から鹿児島までと仙台までとちょうど同じ距離、それが果て、一番遠くだったのです。だから、そういうふうにご

覧いただくと、少し分かりやすい。

もっと分かりやすくしますと、いまは東京が中心です。東京から鹿児島まで、直線で約千キロあります。沖縄の端までは2千キロあります。台湾の手前、与那国島とか。それほどに広がりがある。つまり、単一ではない。そこはもう、全てあらゆる気候風土が変わるわけですから。そこら辺のことは、物事を比較するときには外して考えられない。つまり、京都に居れば、京都から視点を立ち上げる。

沖縄からすると、沖縄からの視点が出てくるのです。沖縄は、日本の端っこと思っていないのです。ずっとアジアの中心と思っている。あそこに琉球王国というものがありましたから。だから、いまもって日本のこととは、ちょっと事情が異なる。表面上はいろいろ似たところがありますが、体の中はやむを得ない、それは事実なのだから。そういうようなことがあります。

沖縄の特徴は、あそこは武士が居なかったのです。武家社会がありませんでした。百姓、農民と、ウミンチュ、つまり漁師、それから、豪族から貴族も居た。薩摩と戦ったときも、貴族がやるのです。戦ったことがありませんから、すぐ負けるのです。

「殺す」という言葉が明治時代までなかったのです。非常に平和なところでしたから、「殺す」という言葉は日本から輸入されました。それが「タックルセー」という、これはいい言葉ではなかったのです。気候風土も違えば、年中の生活も、文化も違うわけです。

ところが、非常に残念ながら、太平洋戦争では、あれほどむごいことがあろうかと思うぐらいの沖縄戦、日本で唯一の地上戦。彼らの、万年の歴史で初めてです。その後、ジェット機基地、逃げる子どもたち、もう年寄りもいつも災難にさいなまれています。

これは、そこで生活してみないと分からない。こっち側（日本本土）に居て、ああ、災難が来ちゃうとか思うぐらいことで、その程度なのです。あそこに住んでみると、耐えられないです。

そういうことが、その場所へ行くと、体に染み込む。ちょっと遠くで見て、頭で理解していることとは全然違います。その違いが地域のつながりの中にたくさんあるということです。

ちょっとスピードが遅いので話します。沖縄は二つに分かれます。奄美の沖縄で北琉球。その先の宮古、八重山諸島が南琉球といいますが、南琉球の特徴は、あそこは島は「クニ」といいます。集落を「シマ」というのです。

つまり、その島からほとんど出ていません。明治ちょうどになっても、女性はほとんど島から出たことがない。世界はあそこしかないのです。あとは何も見えないですから。女性は当然です。それが、自分たちの島が「クニ」だという。ほかを全然知らないですから。

そういうふうな中で、彼らがどういう暮らしをしたかという、祭りです。その祭りが、これは様相がまったく違います。しかし、それは賀茂一族のものとか、もっと古い時代のそのものだと思います。

いくつかの祭りがありますが、あした助監督の須藤義人がお話をしますが、「ウヤガン」を例にとってみます。「ウヤガン」というのは祖霊神、親の神を祭る。それが憑依していく。それで一緒に過ごしていく。やがて、それが脱魂する。祭りが旧の9月から12月まで、だいたい5回行われます。1回が2日とか、3日という場合もありますが、だいたい5日ぐらい。

これは、比嘉康雄さんの写真集です。最後に、脱魂をする。誰にそういうことを言っても、絶対理解できなかつたです。誰もできない。最後の方、もう祭りが途絶える、いまは完全に途絶えていますから。私が見たころは、まだあつた。だから、最後のことだから見せてもらった。比嘉康雄の『神々の古層』（ニライ社）は12冊が出ましたが、これはすごいです。

比嘉康雄さんは、イザイホー、鹿児島と台湾の間で島々の祭りを全部調査しました。写真に残しました。彼はこう言います。「島々につながる神は、全部同じ。母が神になる。姉妹が神になる」。

これがおそらく原型だろう、人類の神の祖型だろう。それがずっとつながっています。それを彼は発見したのです。そんなことを言った人はいままでいない。それだけ、この彼の写真集だけではなくて、いろいろなものに著作があります。比嘉康雄の著書、ぜひ後でご覧ください。

北琉球、つまり沖縄本島、奄美を含めると、その中で「神の島」といわれる頂点になる島があります。「久高島」といいます。私は、あと何年か、十何年、そこでずっと腰を据えて、ドキュメンタリーをつくるわけですが、ここは年代的に言うならば、本物の祭りをやっていて、「イザイホー」という有名なお祭りがありました。これは、もう途絶えました。そのてん末は、明日上映する『久高オデッセイ』に描いてありますので省きます。

ただ、特徴的なものは御嶽信仰という、大伽藍や大神殿があるわけでもないし、何もない空間です。ちょっとだけ石はある。岡本太郎さんは「何もない眩暈」と言いましたが。何もないということは、こちらの内側がずっと入ってくる、むしろ豊かなのです。いまでいう、与えられて、いいことだけやられてサービスだけを受けて、何かあっていいものだと思っていたらとんでもない。

本当に神と向かい合うアミニズムの原点は、そういう向かい合ったときに、何もないものと対応し自分の中にいかに爆発するものがあるかというしぐさなのです。命のしぐさ。与えられるものではない、投ずるものです、風土に。

ただ、そういうアミニズムは、全部もう駄目になってきています。これは、世界中そういう傾向があると思います。これはやむを得ない。いま、それをどうやるかということが叫ばれています。やがてどうなるかということ。それを、ずっといま記録しています。

久高島は一つだけ望みがあります。土地の私有地が一つもありません。土地は神様からの預かりものである。ですから、いまもって、日本で唯一その島だけは、総有制度になっています。賀茂一族以前と同じようなものが、離島ですから、古来からのものが厳然と残ったのです。

僕は、最後、どうしても皆さんに、もう一度言いたいことがあります。このアミニズムというのは、先ほど言いましたように、それぞれ様子を変えていくけれども、共通なのです。これは普遍的なことです。

西洋ではほとんど失われてしまったようですが、彼らにもまだある、世界中の人間という生きものに、一番基底にはアミニズムが全部つながっているのです。だから、山尾さんは『アミニズムという希望』というタイトルを付けた本を書かれたのです。

いまからご覧いただく映像の現物（焼きもの）はこれで、沖縄から持ってまいりました。いま、彼は沖縄随一の焼きもの作家でありますけれども、いまから、これまでつくったものは一切つくらない。これだけをつくっている。

チェルノブイリ原発が暴走した後で、ずっと暮らした生活をつづった記録映画があります。その中で、被爆したおじさんが話した言葉があります。普通、人間は天国に行くことを望みます。彼は「天国はいらぬ、ふるさとがほしい」と言ったのです。おそらく、いまの福島の人たちもふるさとを失ってしまっている。「ふるさとがほしい」と思っているはず。そういう人間の気持ちの中で、これはいままでの焼きものを全部やめて、原風景である焼きもの（家）をつくり始めます。

今日、お見せするのは世界中で初めて、皆さんがご覧になるということでございます。どうもありがとうございました。

○鎌田 大重潤一郎さんどうもありがとうございました。それでは最後に話されました映像を見て休憩にしたいと思います。映像は陶芸家の大嶺實清氏についてのものです。この陶器の家の作品をつくった方で、沖縄県立芸術大学の学長も務めました。この大嶺實清氏の映像で締めくくります。

（ビデオ上映）

○大重 彼です、大嶺實清です。

○鎌田 沖縄を代表する陶芸家ですね。

○大重 そうです。

これは何だという感じですが、家の焼きものです。私もびっくりして、床に置いて撮影していききました。一般にこんなふうに見られるのは今日が、これが初めてです。彼はいまから、「もう千個、

万個、ずっとこれをつくっていきたい」と。これはやはり心の原風景、結局ふるさとなんです。

何とも懐かしい。何とも心が安らぐ。いまから、これをつくった大嶺實清さんは、東日本だけではなく。いま八十幾つなのに、「あと100年生きる」と言う、これをつくるから。ずっとこれをつくるでしょう。われわれも、またずっと記録します。

○鎌田 どうもありがとうございました。大重潤一郎さんの話の中で、印象深いフレーズが幾つもありました。たとえば、「沖縄はアジアの中心だ。日本の辺境ではない」という指摘。ひるがえって、京都は日本の中心だという意識、京都中華主義のようなものが京都にはあると思います。

その京都や東京から見ると、沖縄は辺境である。あるいは、東北は辺境である。だが、そうではないということを含めて問いかける必要があります。「沖縄はアジアの中心である」。また、東北も縄文の中心である。いろいろなところが中心であったということを含めて、もう1回われわれは思い起こさねばならないとも思いました。

「大重潤一郎のフィルムロジー」の「2000年代の軌跡」という段落に、最後の方で話されました写真家の比嘉康雄さんのことが出ています。比嘉康雄さんが末期がんで亡くなる直前に、「大事なメッセージがあるから、大重さん撮って」と頼んで、『魂の原郷ニライカナイへ』という比嘉康雄さんの映像がつけられました。これもぜひ機会がありましたら、ご覧いただければ幸いです。

それではこれで、第一部を終了します。



『久高オデッセイ 生章』撮影中の大重潤一郎監督（真ん中・車イス）と須藤義人助監督（右）

第二部 ミニ講演とパネルディスカッション

○鎌田 それでは、次に、第二部を始めます。

先ほど何人かの皆さまが、大重潤一郎監督が「家1軒買った」という陶器の作品に非常に関心を持たれて、ここに来て手に取ってご覧になっておられました。この陶器作品の作者の大嶺實清さんについては、「大重潤一郎のフィルモロジー」の中に、「1995年、未曾有の犠牲者を出した『阪神淡路大震災』に遭遇し、その惨状を目の当たりにし、身をもって体験した。そこで得た経験から、自然に対する畏敬の念が益々深まり、映画作りへの意欲を燃やすこととなる。その直後、『PANARI』の制作で頓挫していた編集作業を進めた。ついに1995年の末には完成し、自然と人間のかかわりを描いた沖縄二部作、『光の島』『風の島』として全国上映されることとなった。この二部作は、自然の気配を写しこむ映画監督、すなわち『気配の魔術師』として評される切掛けとなったフィルムであり、大重の映像手法が凝縮されていると言える。大重作品は、沖縄の自然をテーマとした『光りの島』を皮切りに、自然の中における人間の立ち位置を、常に自然の側から問いかける作品を作り続けることになった。」とありますが、この「PANARI (パナリ)」というのは、「パナリ島」とも言い、そこに「パナリ焼」という焼き物があります。八重山諸島の新城島（アラグスクジマ）が「パナリ島」、すなわち「離れ（パナリ）島」と言い、そこで大嶺實清さんがパナリ焼を復元するのを映像に撮ってドキュメンタリーにしました。それが『風の島』という作品です。

引用の最後のところに、「沖縄二部作、『光りの島』、『風の島』として全国上映されることになった」とあります。自然と人間との関わりを、大嶺實清さんの新城島のパナリ焼の復元の過程を通して、50分ほどの作品にまとめたものが『風の島』です。

それでは、これから第二部に移ります。第二部は3人のミニ講演です。

まず、「下鴨神社（賀茂御祖神社）の葵祭と神饌」と題して、下鴨神社の禰宜さんでいらっしゃる嵯峨井建さんに講演していただきます。よろしくお願ひします。

講演1 「下鴨神社（賀茂御祖神社）の葵祭と神饌」

賀茂御祖神社禰宜 神社祭祀研究・京都大学非常勤講師 嵯峨井建

下鴨神社禰宜の嵯峨井と申します。よろしくお願ひ致します。先ほどの大重監督のエネルギッシュな感性豊かなお話のあとでするのは、きわめて分が悪い。しかも『京都歳時記 葵祭』というダイジェスト版ですが、すぐれた作品を拝見し、灯台下暗しという感じがしまして、少し意気消沈しています。

上賀茂神社の村松さんもそうですが、実は今日は新嘗祭の日で、ゆうべから参籠で神職全員が泊まり込んで、朝一番に大祭をおつとめしこの会場へやってきました。じつは、こうなることを恐れ直会でちょっとおなかのお清めをし、少しはパワーアップをしまいいりました。でも大重監督の余りのパワーに太刀打ちできず、ちょっと立て直しが難しいんですが、といいながらも、貴重な時間をいただいておりますので、早速すすめます。

当事者の立場から、立場上知り得た秘密は言っではいけないんですが、ぎりぎりまで、失職しない程度に。とくに村松さんの場合、御阿礼祭みあれになりますと、本当に神秘なお祭りで、映像も入口までしか写していませんでしたね。そういうこともありますけれども、ともかく当事者の立場から、葵祭の神饌ということでお話をさせていただきます。

賀茂両社の位置関係は鴨川と高野川の合流点に糺の森に包まれた下鴨神社、左の鴨川の上流に上賀茂神社があります。ご覧のようにこんもりした森ですが下鴨神社はびっしり都市化の波が迫っています。広さは12万平方メートル、もし切り開いたら、甲子園球場が三つくれる広さです。都市化の波は迫ってはいるものの、それでも京都開拓以前の植生をのこす古代の森、糺の森です。また比叡山西南に御蔭祭をおこなう八瀬の御蔭山があります。



さて一言で言うと「葵祭」ですが、全部で10余りの神事から構成され、5月15日だけで終わるわけではありません。前の儀式、本祭、後の儀があります。流鏝馬神事、みそぎの儀、御蔭祭、そして本番の賀茂祭、と上賀茂神社さんにもたくさんございますけれども、その総称が「葵祭」です。今日は、5月15日の、勅使を迎えたいいわゆる本祭りに絞らせていただきます。

下鴨神社と上賀茂神社は、要はどう違うのかというお話ですが下鴨神社は親神さんです。お母さんとおじいさんの神。上賀茂さんはそのお子さん、若宮さんです。親子関係にあり、両賀茂が相まって賀茂神社ということになります。お伊勢さんが、内宮、外宮があつて伊勢神宮であるように似ていますが、伊勢は親子ではありませんから意味が違います。賀茂両社は親子の間柄にあり、共に賀茂族の氏神として、とくに平安時代から王城鎮護の社として発展してきました。



葵祭をお話しする上で、一応基本的なことでありますが、下鴨の神様は、玉依媛たまよりひめという美しい女神さまです。鴨川の上流から丹塗の矢が流れてきて、水遊びをしておられた女神が拾われ、床の辺に一晩置いて休まれた。そして一晩でお生まれになったというのが、上賀茂神社の明神さんです。

『山城国風土記』は京都のことを記した最古

の史料で、これ以上古いものはありません。奈良時代に編さんと言いましても、『山城国風土記』逸文となっていますように、いろいろな書物に引用されたものを集めたものです。『出雲国風土記』は全文が残っていますが、『山城国風土記』は逸文の寄せ集めです。

そこに、葵祭（賀茂祭）のルーツが書いてあります。逸文ながら、よくぞ残ったなと思います。読んでみますと

「その祭祀の日、馬に乗るは、（欽明）天皇の御世、天下、国を挙りて風吹き雨零り、百姓愁ひを含む。その時、トへしむ。乃ちトへて、賀茂の神の崇と奏するなり。よりて4月の吉日を撰びて祀るに、馬は鈴をかけ、人は猪の頭を蒙りて駈馳す」

どうも今と違ってかぶりものをして走ったらしい。

「以って祭祀を為し、能く祷ぎ祀らしむ。よりて五穀成就し、天下豊平なりき。馬に乗ること、ここに始まるなり」

冒頭に鎌田先生がお話になりましたように、こんなにも震災や災害の多い一年でありましたけれども、実は、この葵祭はどうして起こったかというのは、一緒ではありませんけれども、「風吹き雨降り、百姓愁ひを含む」。台風や雨風などでお米がとれなくなってしまったんです。

欽明天皇は大変困られ、お抱えのいわば占い師、ト部をよびました。京大の後ろにある吉田神社の神主家の先祖です。吉田ないしト部という氏族で、ト部伊吉若日子と、名前まで分かっています。

彼を呼んで、ト部よ占いたまえということで、亀ト、亀の甲で占ったのだと思いますが、どうして馬を走らせることになったか、その判定の経緯は書いてありません。ただ結果は、賀茂の神のたたりであると。賀茂の神様が大変怒っていると。

では、どうしたらいいか、馬を走らせろと。鈴をかけて、しゃんしゃんと行くんでしょう。その時、かぶりものをして走らせろと。「能く祷ぎ祀らしむ」。さらに丁寧に賀茂の神様にお祭りをして下さい。そうしたら、五穀豊穰、天下太平、実り豊かな翌年が迎えられた。

「馬に乗ること、ここに生まれり」とあり、賀茂の神様は馬が大好きということがわかります。馬の行事は、上賀茂神社さんに、とくに古いものがたくさん残っておりますけれども、これが葵祭のルーツです。

『山城国風土記』が編纂されたのが奈良時代で、欽明天皇の時代ですから、6世紀の前半ぐらいです。一応6世紀の半ばぐらい、ちょうど仏教が伝来したころです。欽明天皇の時代というのは仏教が入った時代でありますけれども、そういうことがあった。お祭りのルーツを知ることができます。

いま葵祭というと雅という、平安時代以来の華麗なイメージをもちますが、当初は土俗的な、心を沸かす荒々しい祭だった。牛車もない、十二単衣もない、もちろん東帯もなかった。ともかく、馬を走らせること、それが葵祭のルーツでした。

また、賀茂社は、はじめは古代の賀茂族の氏神でありました。そして桓武天皇が奈良の都に見切りをつけ、一旦長岡京に遷りました。ところが場所がちょっとよくなかった。

そして平安京へ移るといことになるわけですが、そのことによって賀茂社および葵祭は変容を余儀なくされました。土俗的な地方の田舎の祭りがやがて、みやびなお祭へと変化を見せたのです。土俗的な祭りからみやびな祭へ。そして都を守る王権守護の神社となり、ついに天皇の祭になった。天皇の命によって、勅使が参向する、それが中心です。下鴨も上賀茂も勅使が到着すると同じ状態になります。つまり到着された勅使を中心に儀式が進められる。

私なんかは、勅使が入ってきたら、もう1時間半座りっぱなしで、ほとんどすることがありません。幣帛という特別の供え物が奉られ、勅使は御祭文を奏上、牽馬、東遊を奉納される、これが葵



葵祭の核心は走馬、古代祭祀の伝統が生きている

祭の核心です。平安京以後は天皇の祭、天皇の代理の勅使を中心に祭儀は展開する。私どもは、これからお話しする神社側のお供え物をあらかじめ丁寧につくって供え、祭列を待つ。そして平和であるように、豊かな日本であるように祈るのが葵祭です。

さて、神饌のお話ですけれども、今日はちょうど新嘗祭にあたり一年の実りを感謝するお祭り日です。装束をつけて、御扉を開け九時から始めて十時半ぐらいには終わりました。直会ではちょっとお神酒を頂いたりします。

今日は、新穀感謝の実りを感謝するお祭ですが、神主が、やはり前日にお供え物をつくるんです。私は不器用でやりませんが、ベテランが神饌を調理します。

神主になったとき、先輩から言われるどうしても大事なことが幾つかあります。

当たり前のことなのですが、とにかく清澄さです。神饌は清らかにつくる。清らかな水、清らかな火、清らかな器で。そういったもの全て、さらに食材はできのいいものを調理する。そして自身も汚れに遭わないように参籠し、真心籠めて 清らかなものを供えるというのが鉄則であります。

神饌をお祭の中でどう位置づけるか、これは神主の世界になりますが、お祭の式次第というものがあります。まず、お祓い、いま言いましたお清め。はからずも触れてしまう、あるいは知らずして犯してしまう罪、汚れはありますから、あらためてお祓いをする。人間も、お供えも全てお祓いをする。大幣おおぬさという祓いの道具、塩で清めたり、行事によって、いろいろな作法がある。

そして初めて清めした神饌は、本殿へ運び、けんせん献饌があります。写真は本殿に供えたものを、終わった後、お下げして再現したものです。本殿の神様の真ん前の状態です。

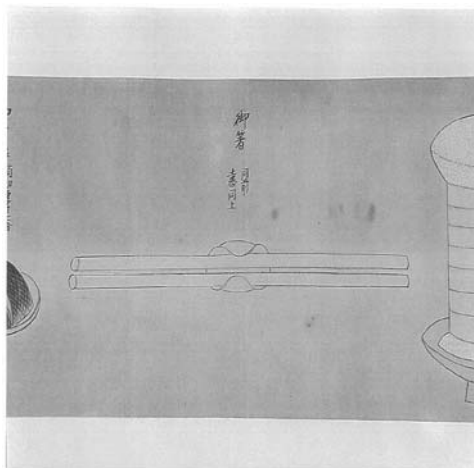
村松さんの話の中心になる、この葵がまず神様に一番近い位置に供えられます。葵と桂を山盛りにしたものです。まづ葵桂（きっけい、といいます）を供え、いよいよ神饌をフルコースで供えます。

要は、海、川、山、野（ぬ）です。海のもの、川のもの、山のもの。野は野原で畑でつくられた野菜類。そういったものを調理する。これはまさに天地の恵みですね。傷んでいない、清らかなものを調理し高坏に盛ります。

献饌けんせんの後は祝詞を奏上し、玉串ではサカキに祈りを込めてお参りをします。そして雅楽を演奏するなか撤饌てっせん、御膳を下げるわけです。

いったいお祭の要は何だといえ、ある方は、神へのもてなしの献饌が一番と云い、いや、そんなことはない、祝詞が一番とおっしゃる。どっちもどっちで、私に云わせれば両方とも大事だとおもいます。まあそのぐらい、お供えはお祭の核心になるわけです。

早速、葵祭（賀茂祭）の神饌でありますけれども、これ



賀茂祭神饌



琵琶湖堅田 供御人奉獻

は下鴨神社版です。上賀茂神社さんはもっと複雑と言いますか、メニューが多彩です。

フルコースで初献、本膳、後献と順番に雅楽の演奏されるなか行方、最高のおもてなしです。

神饌を調理するのが大炊殿と、供御所の二つの建物です。大炊殿は植物性の米、野菜、果物など。供御所は魚鳥類を調理する。今は便宜上、西の供御所で全て前日に食材などを運び込んで調理し、翌朝に東西本殿前の片半屋に並べます。

たとえば鮎の調達地は琵琶湖の堅田です。堅田の神田神社の供御人たちが、毎年、フナを献上しております。葵祭の前日、14日に供御人が警護の棒を持ち、古風は衣裳で行列をして神社に運び込まれます。唐櫃の中には鮎、鯉、鮎ずしが入っております。

片半屋
(東本殿)
神饌



片半屋
(西本殿)
神饌



当日朝、片半屋に並べますが、写真は本殿に供える直前の状態です。ここから本殿に伝供（神饌を手渡しで運ぶこと）するのですが、神前に控えて並べる配置が決まっています。

毎年、神様への配膳役の私など、前の晩は神饌の配置表を頭の中にたたき込みます。間違っても神様はお怒りにならない、神様と私のみが知る世界です。でも、伝統の配膳作法は神との決まり、仕来りとして間違いは許されません。たとえば初献の部分、これだけでも順番があります。まず、お箸。ついで唐菓子といわれるブト、マガリ。つぎ本膳に移るともう1回、箸を出します。ご飯、その右にお塩、御最花と言って、これもご飯です。

さらに御汁鮎。ご飯の下に行くと、マス、塩引、お酒ですね。干しダイ、打ちあわび、餅。下には詔陽魚という小魚、干物。アユ、サワラ、エビと並べます。一通り済むと、最後に後献、デザートです。洲浜、おこし、かちぐり、吹上の四品を供えます。

本殿が二つありますから、東西が同時並行で供えます。だから普通の神社の神主の2倍の祭員がいます。

初献、本膳、後献。最後に堅田から来たフナを案の下に差し入れます。天皇のお供え、幣帛は殿内におさめます。

向かって右が玉依媛さまで、女神さん。左はお父さんの建角身の神、男神です。普通は男が優位と思うんですが、そうではないんです。娘さんも対等に扱います。

ちょっと余談ですけども、下鴨神社の正式名称は賀茂御祖神社。「カモゴソ」と呼ぶ人がいるんですが、ごそごそとやると困るんですが、「みおや」と読みます。祖は母神だそうです。全国の神社台帳である『延喜式神名帳』で「祖」があると、だいたい女神さんがだそうです。祖は母なり、とある研究者のお話にショックを受けたことがあります。ああ、そうなんだとあらためて納得できました。だったら、下鴨神社は、お父さんより娘さんを代表名にしているんだということになる。扱いは、西と東で左右対等ですが、神社名は女神で名乗っていることになります。

先ほど鯉、鮎の調達地の堅田の例を出しました。

アユは干しアユ、貧相に一見みえますが、これは鵜匠が長良川のウ飼いで捕れたものが、届きません。丹波から採れる丹波栗。そこには下鴨神社の神領地でした。全国に「かも川」、「かも村」と「かも」と付いたら、全部、賀茂神社です。それは上賀茂神社か下鴨神社のどちらかです。それは祭神を見れば分かるんですけども、全国500カ所ほど、はっきり致しております。

本日のテーマのワザという部分ですけども、例えば、ここに品書きがございます。品書きというか、巻物、卷子本です。下鴨神社のこういう巻物は5種類ほど、一応部外秘になっているんです、と言いつつ出してありますけれども、冊子本やら、いっぱいあります。ふんだんに伝承資料はあ

るんです。

そういうものを見ながらやっているということなのですが、一つ大事な点は、明治までは世襲で家が決まっていた。下鴨神社の北側に、膳部町かしわべちょうがあります。いまでは外からの入り人が多いですから、膳部町（ぜんぶちょう）と呼ぶ人が多いようですが、お膳の膳に部分の部。膳部町（ぜんぶちょう）と言って、膳部町かしわべちょうと言うんですが、こういうお供えをつくっていた家の町だったんです。その人たちが、大炊殿くろまやの車舎でつくったということになります。ところが古いものはないんですね。江戸の終わりから明治初年までのものは数点あります。私はこれが不思議で、いまわれわれの葵祭のお供えというのは、決して新しいものではない。

世襲で、親から子、子から孫へ伝承していた。ところが明治4年に、世襲制が廃止され、そして国家管理になりました。それによって、何て言いますか、国の命令で、いまはやりのリストラをされてしまったんです。失われたものは極めて多いんです。

そういう危機に臨んでつくったのが、僕はこれだと思っております。近代のものしかないんです。昔はこういうものはつくらなくてよかった。おじいちゃんが子へ孫に、おまえ下手くそと怒られながら、毎日大炊殿に詰めて行っていたわけですから。

そういうワザの伝承と言いますか、世襲で使われていたということです。神主も世襲制が切られて、もう最大のピンチなんです。伊勢神宮も、全国の神社は、明治維新によって神社が復活して威張ったとか、国家神道とかと言われるんですが、そういう一面もあります。でも、失われたものがものすごく多いんです。お祭りが廃れました。こんなにきっちりやっているのは葵祭だけなんです。

調べましたら、葵祭のときに、毎年土器を500枚調達している。これは500枚ではなくて50枚だろうと。違うんです。なぜかと言うと、境内にある撰末社、全部やっていたんです。朝の祭り、夜の祭り、翌日の祭り、そうすると500枚になるんです。

その土器はどこで焼いたのか。それは京都北部の木野に調達所がありました。そこも職人さんが、とうとう絶えてしまいました。

いま誰がやっているかという、われわれがやっているんです。何でもかんでもやるわけです。神主は料理人だけではなくて。本当に、そういうことになります。

最後の4番目の問題。ちょっと詰まっておりますので、はしょって、「ぶと」、「まがり」というのを挙げております。揚げ物です。最後のデザートになるんですが、油で揚げるんです。ごま油です。芳しい香りがします。

いったいこれは何だということですが、これはどう考えても大陸伝来です。揚げ菓子というのは、大重監督の話にもありましたように、沖縄でも油で揚げます。このごろの通説は、遣唐使が持ち帰ったものが日本化したという。氏神の春日大社にふんだんにもものがあるんです。揚げ菓子は近畿地方に多いんです。

ギョーザ型です。それを重ねているんです。こねこねと米粉を、中にはギョーザみみたいな詰め物はないですから、ちょっと食べられませんが、僕はいつも内緒で、砂糖を2、3個入れたのをつくってくれと頼んで、おいしいです。いつもにんまり一人で、たちの悪い神主なんです。ぜいたくです。

でも、僕はよく言うんですが、神様には舌がないと。味覚がない、味付けがない。ちょっと生臭いものが多いです。これだって、ちょっと人間は食べられたものではないです。

切り身のふんだんなメニューもあるんですけども、たまり（醤油）もない。塩はあります。そういういろいろな問題、要は遣唐使が持ち帰った異国の珍奇な、珍しいものを神様に供えようという、そういう気持ちが入ったのではないかと思われま。

もうちょっと時間が、すみません。コンパクトにまとめないといけないんですが、葵祭の神饌というのは、7に一応書いておきましたけれども、祝詞の文言なんです。「海川山野の種々の味物」と語るんですが、要は、海、川、山、野原の豊かな自然なものをお供えするんだと。

「味物」と言ったら、食べ物です。『延喜式祝詞』にある有名な言葉なんです。そういう豊かなも

のが、初献・本膳・後献の順で、フルコースで、雅楽を演奏しながら供える。神への最大のもてなしである。

やはり王朝風です。後の討論の中で触れたらいいんですが、宮廷風であるんです。器がそうですけれども。天皇側近の台所、御厨子所^{みずしどころ}というのがあるんですが、中世に派遣されているんです。おまえたち5人、下鴨神社へ行ってお供えをつくれという。これは地方社からの一つの脱却のてこ入れかなと、これはうがった見方かもしれませんが、改革がなされているんです。王城鎮護の社にふさわしいお供えに変えられたという。そのときに、このから菓子、ぶと、まがりも入ったんだと思います。

外来のこういうメニューが入っている。鎌田先生はほら貝を吹かれますけれども、雅楽なんていうものは異国の前衛音楽です。あんなものをよく受け入れたと思うくらいですけれども、見事に日本化して、出発点のシルクロードにも、中国にも、ほとんど残っていないという、まか不思議な世界ですけれども、神道は決して後ろ向きの、古いものだけではなく、新しいものが好きであるということ。

これは中身はないんですが、神饌というのは食文化のタイムカプセルです。とにかく守れという、お品書きも定めて。逆に平安時代の食文化を探るにはこれしかないんです。皆さん案外着目されないんですが、このごろ、ときどきそういう方がありますけれども。神社の神饌、古いものを見ると、平安時代前の食文化をうかがうことができるという側面もあります。

すみません、時間が超過してしまいましたので、話はこれぐらいにさせていただきます。また討論等もありますので、補足させていただきます。

○鎌田 どうもありがとうございました。神饌を中心に話をさせていただきましたが、私は神饌が大好きというか、大変関心を持っております。

なぜかという、それは何よりも形態が美しい。神饌のお供えの形、デザイン、色、全てにおいて本当に美しい。こういう雅な美的感性がどこから生まれてきたのか。そこに非常に感動すると同時に、関心を抱きます。

では次に、葵祭のもう一面を見ていきます。いまのは美しさということでした。もちろん競馬も美しいとも言えるんですが、同時に野生の荒ぶるダイナミックな感覚があります。賀茂の祭りの野性味がそこに表れ出ていると思います。賀茂祭の雅びと荒びという二面性。

それでは、次に上賀茂神社（賀茂別雷神社）の村松晃男権禰宜さんにお話しさせていただきます。よろしくお願ひします。

講演 2 「上賀茂神社（賀茂別雷神社）の葵祭と競馬と葵」

賀茂別雷神社権禰宜・NPO法人葵プロジェクト理事・事務局長 村松晃男

皆さま、こんにちは。上賀茂神社（賀茂別雷神社）の権禰宜を致しております村松でございます。嵯峨井先生よりずいぶん後輩になるのですけれども、生意気にも、ご一緒のところに登壇させていただきました。

さて上賀茂神社と下鴨神社には、同じお祭りがございます。もちろん葵祭がそうです。今日のシンポジウムに参加させて頂いて嵯峨井先生のお話を伺って、私自身すっかり満足してしまったというように感じております。

また、大重先生のお話も伺いまして、普段、私たちは祭典を奉仕している立場ですので、客観的に見るという機会がなかなかありません。今日は、そういった意味で本当に楽しい時間を過ごさせていただいております。

今日は、「ワザとこころー葵祭から読み解くー」、「上賀茂神社の葵祭と競馬と葵」というタイトルを鎌田先生からちょうだい致しまして、ワザとしての賀茂祭というのを、競馬、御阿礼、葵。こういったことを通じて、何か皆さまにご提示できれば幸いと思っています。

先ほど大重先生からも、組織には変わったものが交じた方がいいというふうなお話がございましたが、私はどちらかというと、とても変わった神職だと思います。

この世界に入りましてまだ十数年という若輩者です。なぜ宗教の道に入るようになったかという、実はアメリカに行ったときに宗教というものに巡り会ったのがきっかけでした。

日本にいと、宗教というものを、普段あまり考えたりする機会がないのですが、ニューヨークに住んでいたとき、地球の縮図のようなニューヨークの町で、なぜこのようにさまざまな民族がそれぞれの個性を持って生活できているのかと不思議に思い観察をしていたときに、ああ、宗教が深くかかわっているのか、と感じました。

顧みて日本の場合、いったいどんな宗教があるのかと思ったとき、私の身近にあったのは仏教でした。少し仏教の勉強を致しまして、次に出合ったのは山岳宗教でした。先生もほら貝を吹いたりなさるのですけれども、そういったことも経験して、次に出合ったのが神道でした。

普通、宗教というと、必ず『バイブル』、聖典があるわけですが、聖典を持たないこの神道が素晴らしいと思ったのです。これこそ、世界に向けて示すべき日本の文化ではないか。ということで門戸をたたいたのが上賀茂神社だったのです。

何も神社のことを知らない私ですから、上賀茂神社というところをノックできたのだと思うのです。いまだったら、上賀茂神社に行ってノックをしろ。なんて言われても、とうていできないでしょうが、そのときは本当に、生まれ育った近くにある上賀茂神社に行って、神道を知りたい。実はこんな唐突な事から神職になる機会を頂いたので。

そんな訳の分からない人間を受け入れてくれる神社、神道というのが、とても寛容な世界だということを、後から気付かされたというわけです。

この上賀茂神社がどのようなところに位置しているのか。そして葵祭が、いったいつごろから始まって現在までつながっていったのかを追い掛けて行きたいと思います。

上賀茂神社の正式名は賀茂別^{かもわけいかつちじんじや}雷神社です。ご祭神の名前は賀茂別雷大神。ご祭神は、雷をも分けてしまう程の強い力をお持ちの神様であると言っています。そのようなとても強い力で様々な禍事から守って頂くとともにもう一つ、雷鳴が轟くと落ちてくるのは雨。つまり、大いなる自然の力と生命の源である水の神様。そして上賀茂神社のご祭神の母神様と祖父神様を祀るのが下鴨神社、賀茂御祖神社です。

さて、上賀茂神社はどのぐらい歴史をさかのぼれるかというと、約 3200 年昔の土器があの辺りから出土しますので、縄文時代の終わりのころには既にそこに集落があって、何らかのそういった聖地として神事が行われていたのではないかと考えられています。

では、いつごろから神社というふうになったかというところ、そこは定かではありません。この上賀茂神社の例祭が賀茂祭（葵祭）で、もちろん下鴨神社の例祭でもあります。

この例祭、葵祭がいつごろから始まるのか。

話は急に変わりますが、近頃ニュースを見ていますと、TPP という言葉を良く耳にします。環太平洋戦略的経済連携協定です。この協定を結ぶ事が歴史的転換となるかは、歴史が教えてくれる事になるのですが、私は日本には過去に2回大きな転換点があったのではないかと考えています。

先ず一つ目は、遡る事 140 数年前、江戸時代の終わりから明治時代の始め、そうです、明治維新というのが日本の大きな転換点となったのは、皆さんもご存じの通りです。西洋に向かって門戸を開き、富国強兵、一直線では進んでまいりました。そのときは国を二分した議論が交わされて、日本は門戸を開き転換を進めたわけです。

そして、その前はという、更に遡る事 1300 年ほど昔の欽明天皇の御代ではないでしょうか。どんな時代だったのか。先ほど嵯峨井先生の方からお話でしたが、仏教が大陸や朝鮮半島から入ってきたとき、日本は大きく方向を転換し、新しい歴史が始まったのではないのでしょうか。実は賀茂祭（葵祭）は、その時に始まります。何かロマンを感じるころではないでしょうか。

この両賀茂社が鎮まるところがどんなところなのかもう少し詳しく説明しますと、お手元の資料に二つの地図を載せております。左の方の少し黒っぽい地図（図1）は、京都市街を上空から見たものです。何を見ていただきたいかというところ、川の流れです。真ん中のちょっと下の方に2本の川が合流しておりまして、左上の方から、下の方に流れているのが桂川です。そして右上の方から流れ込んでいるのが鴨川でして、この合流点に平安京が築かれました。そして、この右手の鴨川を上っていきますと川が二股に分かれています。右上から流れ込んでいるのが高野川。そして左上から流れ込んでいるのが賀茂川です。この合流点に下鴨神社が鎮座しています。

更に左手の賀茂川を上流に上がってまいりますと、ここで右側の白っぽい地図（図2）をごらん下さい、平安時代の上賀茂神社の境内を写したものと伝わる古絵図です。

中ほどに川が流れていまして、2本の川が合流しています。左上の方から降りてくるのが、御手洗川。右上の方から来るのが御物忌川です。そしてこの2本の川が合流しているところに上賀茂神社のご本殿があります。

こうして川の様子を見てまいりますと、どうやら一つの法則が見えてまいります。2本の川が合流する、その中州が大切な場所なのだと思えます。遠い昔の人々にとって、そういった中州は、神様が鎮まる神聖な大切な場所だと考えられていました。

この京都盆地（山城盆地）は、背後に山が迫る山城の国。そしてこの山城の国の北の際、山の際に鎮座しているのが賀茂社です。ここは、山城盆地の北方にある山々に降り積もった雪や降り注いだ雨が地中深く染み込み、そして何年もかかって湧き水となって地上に出て小川となり、1本の川になって山城盆地に流れ込む。そんなところに、この賀茂社があるというわけです。

歴史に残らない遠い昔、人々は少し高台になっていて豊かな水があるこういったところがとても住みやすく集落を作りました。ひょっとしたら何万年も前から人々は住んでいたかも知れないですね。

京都大学があるこの辺りも、縄文のころの土器が多数出てまいりますので、賀茂からこの辺りにかけては遠い昔から人々が住み、どうやら集落をつくっていた。そんな場所でこの賀茂社の歴史は始まっています。

さて、どのように信仰が始まったかというのを「賀茂神話」が教えてくれます。『山城国風土記』の中に出てくるこの物語。物語をもとにして描かれた4枚の絵（図3）を、資料に添付させていただきました。

賀茂社の辺りは、賀茂氏が治めていました。賀茂氏のご先祖の名前を賀茂建角身命さまと言いました。賀茂建角身命のお嬢様、玉依媛さまは、毎日のように賀茂川に出てみそぎをなさっていたようです。みそぎをなさっていたそんなある日、上流から矢が流れてくるのを見つけられます。と

でも驚かれますが、その矢を玉依媛さまは思わず賀茂川から拾い上げられて、持って帰られました。持ち帰られた矢を、一晚枕元に置いてお休みになったところ、矢の不思議な力によってご懐妊になります。お生まれになったのは男のお子さま、若宮さまでした。しかしお父さまは分からない。分からないままに月日はどんどんたって行き、無事に成人を迎えられました。おじいさまとお母さまは大喜びです。そこで、八尋殿という立派な御殿をわざわざお建てになって、全国のさまざまな神々をお招きになり、祝宴を七日七晩にわたって催され、最後の日に父親探しをなさいます。『この中に必ず父親がいるはずだ。若宮、おまえはどの方がお父さまなのかが分かるに違いない。その方にその杯を差し上げなさい』杯を受け取られた若宮さまは、その杯を何と、天に向かって放り投げて、ご自身も雷鳴とともに消えてしまいました。

しかし、もう一度会いたいと願われるおじい様とお母様。ある日、若宮は母の夢の中に表れ、「われに会わんとには、葵桂のかずらで飾り、馬を走らせ、そしてお祭りをし、待てば来む」。このようにしてご神託を頂き、おじい様とお母様がその通りにお祭りをなさったところ、若宮は上賀茂神社の北方約2キロメートルにある、神様の山と書いて神山こうやまと呼ばれる山の頂きに降りられました。それから、神山に向かって神事が始まると伝えていきます。

この神話に基づいて、賀茂祭（葵祭）は行われています。先ほど、映像にもありました、みそぎ、御阿礼、走馬など、全ての要素がいまの神話の中に含まれていたのを、もうお気づきかと思います。いまも全てその通りに行われているお祭りです。

その中から幾つか、お祭り、神事をご紹介していくのですが、御阿礼神事は秘儀です。どこまで皆さまにご紹介申し上げたらいいのか悩みながら、少しでも何か皆さまにワザを感じていただけるお話できればと思っています。

阿礼とは、神様がお生まれになる、また再生になる、そんな意味合いかと思っています。つまり神様をお迎えする神事です。神事が行われる「御生所」みあれどころがどの辺りにあるのかと言いますと、上賀茂神社のご本殿と、神様がお降りになった神山の頂上にあるご降臨石、磐座とを結ぶ線上にあるんです。それは遠い昔から大切にされて来ました。

資料にご降臨石の写真を載せております。ご禁足地ですので、そこまで行くことはかなわないのですが、畳3畳分ぐらいの大きさの岩が、標高301メートルの神山の頂上に鎮座しています。

この御生所が葵祭の記録映像に残されています。どんな所なのかをDVDでちょっとご紹介したいと思います。

(ビデオ再生)

これが御生所です。

『賀茂旧記』という鎌倉時代に書かれた日記がありまして、そこにこのように書かれています。「われに会わんとには、銚をささげ、走馬を飾り、奥山のサカキを阿礼に立て、いろあやをたれ、葵桂のかずらをつくり、いかしく飾りて、われを待てば来む」と書かれています。

御生所には、ずいぶん大きな榊が立っています。その周りをお囲いと言いまして、松や桧などさまざまな木を使って中が見えない様、囲いをしています。

その中心部から空へ向かって、ずどんとVの字に丸太が伸びているんです。その先端に榊が付いています。

「われに会わんとには、・・・葵桂のかずらをつくり、厳しく飾りて・・・」。かずらというのは、どのようなモノのか、はっきりと分からないのですが、葵祭をご覧になると、人や車や建物を葵桂で飾っています。かんざしのようにしたり、胸に挿したりしています。御生所にある葵桂はそうにしていません。かずら編みと言うのか、鎖のようにしています。「・・・いかしく飾りて、われを待てば来む」。

真っ暗闇の中で行われる御阿礼神事の主役は神職ではなく、神様の人と書いて「神人じんじんと呼ばれる5人の矢刀祢の方です。その日、5人の神人が潔斎をすませて時刻になるとやってこられます。何も打ち合わせはありません。突然お祭りは始まります。

お祭りの次第が書いてある儀中を神職は当然丸覚えをするのですけれども、一言も言葉を発せず、約2時間のお祭りが、だあっと続いています。何の打ち合わせもなく、神様をお迎えし、お迎えした神様をご本殿にお連れ申し上げるのは、その5人の方々です。

いったい私たち神職はどんな役割をするのか。私も最初のうちは、何をしているか分からなかったのですけれども、だんだんと神職というのはいったいどんな役割をするのか、年数を経て教えられて行きます。

5人の方が神様をご本殿にご案内して下さるのですが、神様が進んで行かれるその様子を私たちは見てはいけません。神職はある場所に控えて秘歌を唱えています。目の前を、だんだんと神様が進んで行かれる。

神職が控えている場所は、神の館と書いて「神館^{こうだて}」という所です。

この神館というのはどういうところかと申しますと、斎王が葵祭の夜、一晩ここで神様と共に過ごされる場所です。いまは礎石だけが残っています。西暦810年から1200年にかけて、35代にわたる斎王が葵祭にご奉仕されました。斎王には、天皇のお嬢さまが占いによって選ばれます。斎王は葵祭の前日にみそぎをなさって、葵祭をご奉仕されて、葵祭の当日は、この山の中の真っ暗闇の中で一晩過ごされるのです。

小さいときからご奉仕なさるから、最初のうちは、たぶん何をしているのか分からないままに、ただ一晩過ごして、次の日の朝に戻られるというわけです。

行かれるとき、そして帰られるときの両方に、人々は斎王に会いたがりました。特に帰られるときです。神様と一晩過ごされたからだろうというふうに思います。

その35代の中で、多くの秀歌を残された斎王がいらっしゃいます。式子内親王です。第31代の斎王で、後白河院のお嬢さまです。式子内親王は、斎王をしていた頃のことを思い出して、こんな歌を残していらっしゃいます。

「忘れめや あふひを草に ひき結び かりねの野べの 露のあけぼの」

思い出されたのでしょうか。葵と一緒に休まれたときのこと、その中で一晩を過ごされて朝を迎えられた、そのときのことを。

さて、葵祭の日が近づいてまいりますと、まずは祓いの儀式、競馬^{くらべうま}（図4）です。

神様を慰めるために行われている行事です。なぜ分かるかと言いますと、現在、競馬では16本の矛を立てていますが昔は旗でした。旗は神様を迎えるためのものです。

榊であったりと、時代によっていろいろなモノをしるしとして神様をお迎えするのですけれども、昔は旗を立てていたのが変化して現在は矛になっています。そういったところから競馬というのが神様をお迎えして行うものであるということが分かります（図5）。

そして葵祭に欠かせないのがこの葵という神聖な草、フタバアオイです。先ほど、大重先生の撮ってくださった映像の中で自生するフタバアオイが映っていました。20年前の貴船には、あんなにたくさん群生していたんだなと感心したのですが、実はいま貴船では見当たりません。もう少し奥へ行っても見当たりません。どこから採ってくるのかと言うと、すみません、秘密なのです。言ってしまうと、もうどんどんなくなってしまふんです。

その葵を再び身近な自然の中に取り戻して、日本を代表するお祭り葵祭をみんなで守っていくために、今こんな取り組みを始めました「葵プロジェクト」です。5分間の映像でご案内したいと思います。

（ビデオ再生）

このように1400年以上にわたって行われてきた葵祭を守るために、私たちは何か手を差し伸べないといけないようになってきたようです。これからも、変わることなくこのよき日本の文化を伝えてまいりたいと思っています。

本日はありがとうございました。

○鎌田 どうもありがとうございました。葵祭の本質、歴史、そしていまの葵そのものの現況はどうであるのかということについても、最後にお話しいただきました。

時間も押していますので、すぐに進めていきたいと思います。

最後の講演者は京都大学教育学研究科のやまだようこ先生ですが、このプログラムでは皆さんをすべて「さん付け」で統一していますのでご理解くだされば幸いです。

それではやまだようこさんに、「京の祭りのところを探る」というお話をいただきます。よろしくお祈りします。



図 1

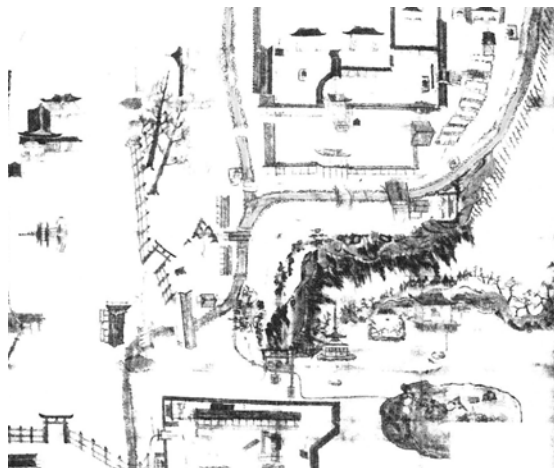


図 2



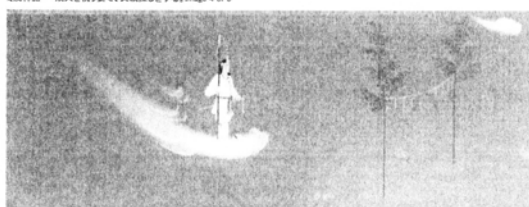
夏夜神話 — 瀬見の小川で糸薙りの矢と出会う, Image 2 of 5



夏夜神話 — 一人を投げ家へ、父親殺しをする, Image 4 of 5



夏夜神話 — 神も縛った矢の神妙なる力で、真ごもる, Image 3 of 5



夏夜神話 — 粟粒を撒く, 夏夜御霊大神の降臨, Image 5 of 5

図 3



図 4

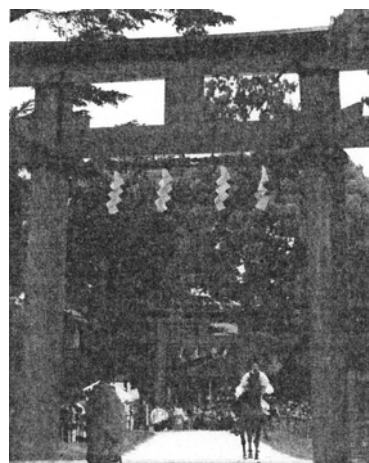


図 5

講演3 「京の祭りのところを探るーたましい循環といのち再生ー」

京都大学大学院教育学研究科生涯発達心理学教授 やまだようこ

京都大学大学院の教育学研究科におります、やまだようこと申します。私の専門は、生涯発達心理学、心理学が専門ですので、ところを探るといふ方向に少しシフトしてお話したいと思います。特に「たましい循環といのち再生」についてお話しします。

先ほど「葵」のお話がありましたが、私もベランダで葵を育てております。本当にすてきな植物です。5月の葵祭のころになると、何もなかった地面から急に芽が出てきて、緑の葉が輝いてきます。今の季節はほとんど葉がなくなりかけているんですけども、冬の間はまったく姿が消えてしまいます。だから、生と再生の循環をよく表している植物ではないかと思っております。

今日は非常に短い時間ですが、お手元の資料(図1)のアウトラインにそってお話しします。まず、京都の下鴨神社の御蔭祭、皆さまがよくご存じの賀茂祭の前の「御蔭祭」と、沖縄の宮古島の「ユークイ(世乞い)」という二つのお祭についてお話しします。両方の違いを探すといくらでもありますし、非常に乱暴であります、共通点を少し見ていきたいと思っております。

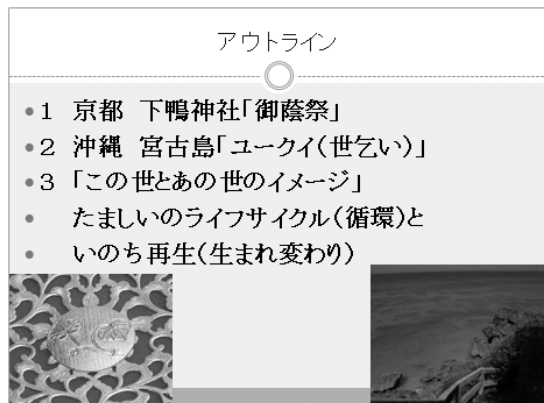


図1

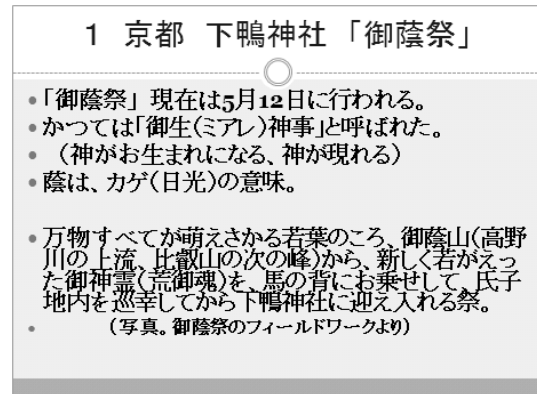


図2

そして私が研究しております、「この世とあの世のイメージ」についてお話しします。特にたましいのライフサイクル、たましいのいのち循環、そして、いのちの再生(生まれ変わり)のイメージについてお話しできればと思っております。

まず最初は、京都の下鴨神社の「御蔭祭」です(図2)。先ほど大重先生が撮っていただいた映画にでてきましたので簡単にお話しします。「御生(みあれ)神事」とも呼ばれ、5月12日に行われます。「蔭」は光という意味です。

ちょうど若葉のころに御蔭山から、高野川の上流に新しく若返ったご神霊を馬の背にお乗せして氏子地内を巡幸してから、下鴨神社にお迎え入れる祭りです。

下鴨神社も上賀茂神社も、それぞれ御生神事が営まれることになると思いますが、これは下鴨神社の方です。古図(図3)のように江戸時代の昔は、川の際に御蔭神社があったようすけれども、現在は山の上にあります。



図3

これは下鴨神社の方です。古図(図3)のように江戸時代の昔は、川の際に御蔭神社があったようすけれども、現在は山の上にあります。

これ(図4)が下鴨神社を出ていくときの様子です。神事そのものは非常に長くて、たくさんの儀礼がありますが、簡単に大事なところだけをお話しします。

下鴨神社から出てきたご神霊を乗せたおみこしです。たぶんかつては馬だったと思うんですが、現在では、こういうかたちで車に乗せられて行きます。



図 4



図 5

それから高野川まで行きまして、御蔭神社まで行列が行くわけです。その行程は省いていますが、これ(図 5)が御蔭神社で、この外側までは、私どもも行くことができます。このときは、たまたま梅原猛先生とご一緒に、この神事を見ておりました。

これ(図 6)は、先ほど映像でもありましたように、一度、下鴨神社からこの御蔭山に行きまして、新たに生まれ変わり、新たに若返られた新しい魂、あらみたま荒御霊であるご神霊を乗せて出てこられたところ です。

先ほどの映画でもありましたように、御蔭山からこういうかたちで行列をつくって下りてまいります(図 7)。

もうこれ(図 8)は下鴨神社まで来たところで、その間に幾つか儀礼があるのですが、神馬に乗せたところです。神馬が入っている場所で舞が行われます。私は詳しくは分からないのですが、ある種の身ごもりみたいなもの、シンボリックな意味もあるのかもしれないと思っています。

非常に興味深いのは、ここから出た後、列の中に子どもさんが加わることです(図 9)。神様が若返られると同時に、列の中に若々しい子どもが入ってくるのです。こうして新しい御神霊が子どもさんを先頭に下鴨神社に戻ってきます。「たましいの生まれ変わり」ともいえる一連の神事と考えられます。

次に沖縄の祭り、ユークイのお話をします。先ほど、映画もありましたので、皆さんもよくお分かりになるのではないかと思います。宮古島のもう一つのお祭りです。これを葵祭と比較するのは乱暴すぎるでしょう。けれども、まったく違った種類のお祭りですが、共通点があることを少しお話ししたいと思います。



図 6



図 7



図 8

ユークイは、祭りの時期も意味もまったく違い、豊年祈願の祭祀です。「ユ-」というのは豊穰という意味です。「クイ」は乞うという意味で、豊穰を乞うお祭りです。

御蔭祭も本来は御生神事として、上賀茂神社では誰も見ることはできません。下鴨神社では一部だけを見ることができますが、いずれにしても、公開している祭りではないわけです。

沖縄の祭りも公開していませんから、普段はまったく立ち入ることができません。そういった神事として行われている祭りです。

ユークイ（図 10、11）も本来は非常に長くて、たくさんの行程がありますが、ここでは簡単にお話します。旧暦秋に、ユークインマと呼ばれる神女、「神人」、神様の人と書いて「カミンチュ」ですけれども、沖縄では女性が神人として祭りを司ります。しかも女性の中でも、数え年で 47 歳から 56 歳の中年の女性です。

神様と言われるこの神人の人たちが、森の中で集落を守る御嶽（ウタキ）に集まって、1 年を終える者を胴上げしたり、いろいろな踊りや歌をうたいます。そういったことをした後、自分の分身の魂が入ったつぼを持ち寄って、一緒に御嶽にお供えします。

一晩、御嶽にこもってお供えをし、お線香をたいて、ずっと歌を歌い続けるわけです。ほとんど祈りの歌ですが、ずっと夜中まで歌をささげます。

そして真夜中に、今度は白装束の祖霊の姿に変わって、御嶽を巡っていきます。頭にシイノキカズラで編んだ草冠（カウス）をくくって、顔は手草で隠して「ヨーンテル、ヨーンテル」というお言葉を、歌を唱えながら集落を歩くという、簡単に申しますとこのような祭りです。

いろいろなバリエーションがあるんですけれども、私がフィールドワークをしました宮古島の西辺（ニシベ）という集落で撮った写真を見ていただきます。

これ（図 12）は宮古島の海ですが、ここに写っているのは、大重先生のお話にも再三出てきました写真家の比嘉康雄さんです。この比嘉さんとの出会いから、私は沖縄のフィールドワークを始めたのですが、比嘉さんが亡くなられたときに、大重監督が『現郷ニライカナイへー比嘉康雄の魂』という映画を撮られたということで、また最近、比嘉さんを介して、こうして沖縄との縁が深まってきているわけです。

これ（図 13）は、西辺の集落の御嶽の中です。ここには神社の鳥居がありまして、多くは、こういったものも本当に何もない、ただ森の中だけの場所ということもあります。



図 9

2 沖縄 宮古島「ユークイ」

- 豊年祈願の祭祀。
- 「ユ-（世）」は豊穰、「クイ」は乞う。
- 「ユークイ」は、3～5日の日程で、旧暦9月吉日にユークインマと呼ばれる神女が執り行う。
- 47歳から56歳(数え年)の神女が、集落を守る御嶽(ウタキ)に集まり、神職を終える者を胴上げして踊る。自分の分身「魂」の入った壺をお供えと共に持ち寄り、御嶽(ウタキ)にお供えする。

図 10

2 沖縄 宮古島「ユークイ」

- 豊年祈願の祭祀。
- 「ユ-（世）」は豊穰、「クイ」は乞う。
- 「ユークイ」は、3～5日の日程で、旧暦9月吉日にユークインマと呼ばれる神女が執り行う。
- 47歳から56歳(数え年)の神女が、集落を守る御嶽(ウタキ)に集まり、神職を終える者を胴上げして踊る。自分の分身「魂」の入った壺をお供えと共に持ち寄り、御嶽(ウタキ)にお供えする。

図 11



図 12



図 13



図 14



図 15

御嶽の中には普通は入ることができません。特に男性は入ることができませんが、比嘉さんは、ずっと通い詰めて信頼が非常に厚くて、フリーパスで、私も一緒に見る事ができました。

この集まってきた女性たちが手に持っているのは、魂が入った壺です(図 14)。この壺は絶対に開けてはいけません。古くには、魂が身体から離れてホテルになるなど、身体の中に魂があるのと同時に、体から浮遊していくという概念がみられます。沖縄では、特に、魂は身体から遊離しようと考えられており、自分の魂の分身をつぼの中に入れて持ち寄ってきます。本当に目に見えるかたちで、魂がこの壺に入っているのです。

これを御嶽の一番奥に並べて置きます(図 15)。この御嶽の森の奥には、亡くなった祖霊が住んでいると言われていまして、祖霊、亡くなった人たちの魂と、いま生きている人たちの魂とが、あるいは自分自身が、このお祭りの中でコミュニケーションする、交歓する。それがこのお祭りです。ですから、亡くなった方々が住んでいる御嶽で、いま生きている人々と、両方の魂が出会うのです。

御嶽の中ですが、こもっている小さな館がありまして、これが祭壇です(図 16)。香炉がありまして、やはりいろいろと神饌を供えます。みんなが持ち寄ってきたいろいろなものが同時に供えられています。地元の産物だったり、本当にたくさんの物が山のように供えられるというかたちです。この上にもお供え物があつたりします。

これは、中でずっと歌を歌い続け、祈り続けている場面です(図 17)。夜ですので、暗くなりますからローソクをつけて、あとはずっと歌い続けます。

真夜中に装束が変わりまして、祖霊の姿になって、まったく白い着物に変わります(図 18)。真夜中に白い着物に変わって、また別の歌を歌うんですけれども、こういうかたちで真夜中に、祖霊と、生きた神人と言われる女性たちとが交歓をするわけですが、自分自身も祖霊の姿になっていきます。そういった変身が行われます。

先ほど申しましたように、こういういでたちになりまして、御嶽から御嶽へ巡っていくわけです。まだ本当に夜中なので、外は真っ暗で、だんだん夜が明けてくるというかたちです(図 19)。

これ(図 20)は御嶽の中で祈りをささげている姿ですけれども、こういうふうにして御嶽で祈りをささげると同時に、とても大きなおにぎりだったりするんですけれども、お供え物をささげたり、祈るということ



図 16



図 17



図 18



図 19

が行われます。

この後は、町内それぞれのところの御嶽を巡り、あるいは多くの村人たちがお供えのごちそうを持って出迎えますので、そこでまた一緒にごちそうを食べたりということがずっと続きます。主なところはこういったところです。

沖縄の祭りと言ってもいろいろありますし、京都の祭りと言ってもいろいろあります。細かい違いを挙げればきりがなくあるのですけれども、先ほど申しましたように、一番元になるような共通性をもつイメージを考えますと、自然という

ものの中で、いのちといのちを交歓することだと考えられます。しかも今、生きている者だけではなくて、新たに生まれてくるもの、そして死んだものとの間にも、いのちを交歓すると同時に、自然のいのちとも交歓する。

一番大事なことは、「いのち」というものが一度死んでしまえば終わりということではなくて、ちょうど自然の恵みと同じように再生する、生まれ変わる、あるいは若返るというような基本的なものの考え方、イメージがここにはあるのではないだろうかと思っています。

最後の話題ですが、私自身は「この世とあの世のイメージ」を研究しております(図 21)。先ほど申しましたように、生涯発達心理学というのが専門分野ですが、この学問では今まで多くは、生まれてから死ぬまでの人生を扱ってきました。もちろん生きている間だけを扱います。

生まれる前、あるいは死んだ後というのはまったく考えないということと、個人の一生だけを考えていますので、前の世代の人とどうつながるのかとか、人間以外の命とどうつながるのかとか、あるいは自分が死んだ後、人と人との間にはどういうつながりを持つのかということは、まったく視野に入っていません。非常に直線的な個人の人生だけを人生とみなしてきました。

それに対して私は、ライフサイクル、いのち循環のイメージが人生を考えるうえに大切ではないかと考えてきました。もともとライフサイクルという言葉がありますから、古来から言葉としてはあるのですが、近代になって廃れました。私は、本来の意味のライフサイクル、いのちの循環のイメージ、特に魂の循環のイメージに焦点をあててみたいと考えています。

心理学というのは、もともとはサイコロジエ(psychology)ですが、psychologyのpsychoというのは、プッシュケーで、もともとは魂という意味ですね。

そういった広い意味での魂のライフサイクルというものをもう少し考えると、もっと新しいと言いますか、古くて新しいと言いますか、そういったイメージや生命観が提案できるのではないかと考えているわけです。

特に、先ほど申しました、世代を継いで、世代を超えて循環していく命のイメージ。あるいはもう一つ大事なイメージとして、生まれ変わりというイメージです。再生するというイメージです。

また、先ほど京都と沖縄の祭りを紹介しましたが、これは日本だけに特殊な閉じられた文化に限られるのかと言いますと、そうではなくて、ほかの文化とも基本的なところは広く共通しているのではないかとというのが、私の立場です。私は、日本とフランスとイギリスとベトナム



図 20

3 この世とあの世のイメージ

- 『この世とあの世のイメージ』(やまだよう編、新曜社)
- 生涯発達心理学の問題
- 一人の人生「生まれてから死ぬまで」のみを視野に入れてきた。
- たましいライフサイクル(循環)のイメージ。
- 一世代を継ぎ、世代を超えて循環するいのち
- 一生まれ変わりと再生のイメージ。
- 一日本だけではなく、ほかの文化にも見られる。
- (日本、フランス、イギリス、ベトナムの大学生が描いたイメージ画より)

図 21

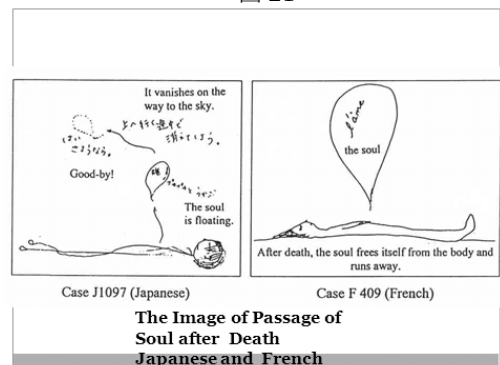


図 22

ムなど、ほかの文化と比較した研究をしてきましたが、その幾つかのイメージをご覧いただきたいと思います。

ここでは、強調するために日本とフランスの二つのイメージだけを取りあげます(図 22)。国際学会で発表したスライドを使っているのですが英語が入っているのですが、左は日本人の大学生が書いた、「この世とあの世のイメージ」です。魂がこの世からあの世へ行くところが書かれています。これは死んだ人です。魂がこういうかたちで昇っていくというイメージです。

右はフランス人の大学生が書いたイメージですが、非常によく似ています。フランスには日本のような決まった魂のかたちというのはないのですけれども、本当に非常によく似たかたちで魂というイメージが描かれています。

フランスはご存じのようにカトリックの国で、宗教としてもカトリックを信仰しているという人が、意外とこういうイメージを書いたりしますので、案外見かけの宗教の違いだけではなくて、その根底には共通して通じるものがあるのではないかと考えているんです。

もう一つ(図 23)、左は日本の大学生とフランスの大学生が書いたもので、魂が循環するイメージが書かれています。空気のように上へ昇っていくわけですね。煙か空気のように昇っていきまして、そして雨になってまた降りてくるという、こういう自然の循環として魂が描かれています。

右はフランス人が書いたものですが、やはり雲の上へ昇って行って雨になって落ちてくるという、非常によく似たイメージが描かれています。宗教の教義は非常に違うのですけれども、元々持っている原イメージのようなものは、共通点があるように思われます。

これ(図 24)は日本人が書いた魂ですが、循環のイメージです。これが死体です。魂が空の上へ昇っていきます。こういう暗い筒の中を中に入って行って、天の上へ行くと、ぴかぴかになって浄化されるというイメージです。

清らかになるというのは、先ほど、下鴨神社でも、上賀茂神社でも強調されましたし、沖縄でも、「清ら」というのは非常に重要なキーワードで、清らかになるということですが、一度魂が浄化されて、しかも匿名化されて、この人から離れて、魂の元みたいになって、ちょっと円形になってくるくと降りてきて、別の人の体内に宿って、また生まれ変わるというイメージが描かれています。

これ(図 25)も典型的な日本での生まれ変わりのイメージ、再生のイメージが描かれています。細かいところは違うんですが、死者から幽霊のようになって出ていきまして、あの世に行って、そしてもう1回おなかの中に入って生まれ変わる。新しい子どもになって、再び生を持つというイメージです。

では、カトリック、イギリスやフランスではそのようなイメージはないかと言うと、数としては

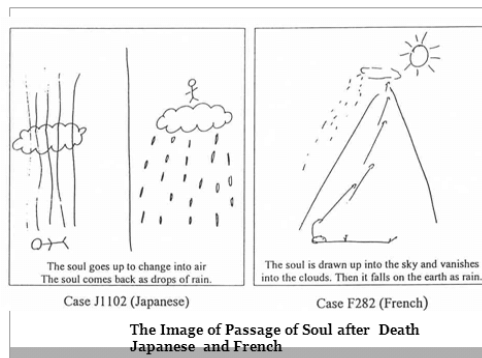


図 23

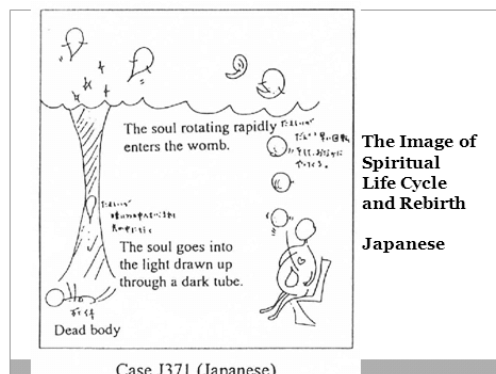


図 24

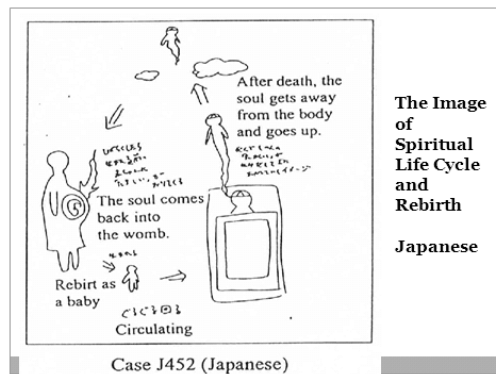


図 25

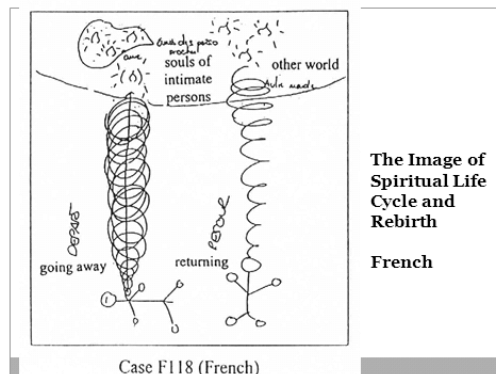


図 26

日本よりも少ないのですが、びっくりするぐらいよく似たイメージが出てきます（図 26）。これが魂です。あの世。そして、もう 1 回こうやって戻ってくるというようなイメージ。これはフランスの絵です。

統計（図 27）をとりますと、やはり日本のほうが多いことは多いんですが、フランスにも生まれ変わりのイメージがみられることは驚きです。特に人間になって生まれ変わるというイメージ 15%、また赤ちゃんになって生まれ変わるというイメージ 18%、両方合わせますと相当なパーセンテージになります。

ほかの生き物になるという輪廻転生型のもの是非常に少なくて、むしろ人間が人間になって再生してくる。新たな赤ん坊になる、新たな命になってくるというようなイメージが非常に多いです。

これはフランスですが、一般的には生まれ変わらない方が多いんですが、それでもやはり、赤ん坊になるイメージが 5%、人間になって生まれ変わるイメージが 12%、これだけあるということは、驚くぐらいのパーセンテージになっています。

最後に参考書を挙げておきましたので、もし関心のある方は、ぜひ読んでみてください。これで私の話をおわります。

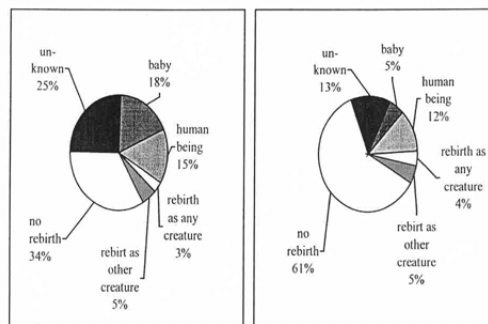


Fig. 6 Proportion of types of rebirth depicted by Japanese and French students

図 27

参考書

- 『鴨社の絵図』 糺の森顕彰会
- 『下鴨神社 糺の森』
- (四手井綱英編) ナカニシヤ出版
- 『日本人の魂の原郷 - 沖繩久高島』
- (比嘉康雄) 集英社新書
- 『私をつつむ母なるもの』
- - イメージ画にみる日本文化の心理』
- (やまだようこ) 有斐閣
- 『この世とあの世のイメージ』
- - 描画のフォーク心理学』
- (やまだようこ編) 新曜社

この世とあの世のイメージ
描画のフォーク心理学

図 28

京の祭りのところを探る

— たましい循環といのち再生 —

やまだようこ

京都大学大学院教育学研究科
生涯発達心理学

2011.11.23(美祭シンポジウム・京都大学)



○鎌田 どうもありがとうございました。いま発表して下さった、『この世とあの世のイメージ』の本は、そちらの書籍の販売部のところに置いてありますので、ぜひ見ていただければと思います。

第三部 パネルディスカッション

○鎌田 第三部、これが最終セッションですが、パネルディスカッションと質疑応答を約1時間進めていきたいと思います。

まず最初に大重潤一郎監督の映像と講演、そしてそのあと3人のパネリストの皆さま方による講演をお聞きしました。

私は、沖縄にも日本の神社神道や葵祭についても、両方ともに非常に強い関心を持ち、研究だけでなく、実践的なつながりを持ちながらやってきました。そういう経験を踏まえて言いますと、最後にやまだようこさんが指摘されましたが、沖縄の祭りと本土の祭りにはやはり深い共通点があると思います。

まず、先ほどのやまださんのスライドの中で出てきた、ユークイの中に、頭に飾る葉っぱがありましたね。あの植物の名称は何て言うんでしょうか。葵祭の場合は葵桂ですけれども、ユークイの場合は何でしょう。ともかく、ここで共通するのは頭に飾る植物です。

沖縄の祭りの多くのは、頭や体に植物を飾ります。八重山諸島のアカマタ・クロマタもそうですね。体中に植物を飾りながらお祭りをを行うというありよう、そのかたちの中に、いのちに対する畏怖畏敬の念やその感性や世界観に共通点があると思います。

ところが、大きい違いとも言えるのは、沖縄は全てと言っていいほど、祭祀を執り行うのが90%近く女性です。もちろん男性の祭りもありますが、その多くは女性が執り行っています。この女性中心の祭りという特色。

日本の祭りは、卑弥呼の時代はいざ知らず、律令体制という天皇制を中心とした日本の古代国家が成立してきた段階で男性中心に変化していきます。もちろん神社には巫女さんはいますけれども、祭りの多くは男性神職が中心となって担っていくようになります。

ところが、伊勢の神宮や両賀茂神社には、わざわざ斎王、斎院という女性神官・祭主を立てました。これは、古式と、新しい男性神職を中心にして執り行うものとの両方が共存しているかたちですね。そこのところに、古いものを残しながらも、新たな律令体制の中で、官祭、朝廷の祭りとしての葵祭（賀茂祭）の位置づけが見られるのかとも思います。

大重潤一郎監督の体調が今日は非常に悪い状態なので、ちょっと途中退席させていただくことになると思います。ご了解いただければと思います。

そこで、4人の今日の発表者の皆さまは、それぞれ自分が語ったことに対する補足があればその補足と、ほかの発表者に対して自分なりのコメントや感想や質問がありましたら出していただき、まずこちらの側のパネリストの間で議論をして、そして最後に10分ほどフロアーのみなさまとの質疑応答を致したいと思います。

まずは、大重さんからコメントを得たいと思います。

○大重 誠に申し訳ありません。ちょっといま体調がずっとあまりよくないものですから。先ほどの補足をするとすれば、僕が印象的なことがあったんで、そこをちょっと補足させてもらいたいと思います。

この前の震災が起こったとき、向こうの学者さんで、「東北学」というものを立ち上げられた方は、皆さんご存じのことだと思いますが、あの方が、やはり東北は差別されていたんだということをおっしゃるんです。いきなりそんなこと、何だろうかと思った。

いや、よく分かりました。やはりどこかで中央から遠いところは、いまは東京から遠いところ、福島県は原発の場所に指定されたり、どこかで東北を差別したり、うそを平然と言ったりするとか、そういうところがあるんですね。

そのとき、初めて、腑に落ちたことがあるんです。僕は沖縄にずっといまして、沖縄の人たちは、本当に必死に反対運動をやるわけです。おばあちゃんとか、いまの辺野古も。何でこんなに一生懸命なのかというのがぴんと来なかったんです。いや、90何%はわかりますよ、頭で。体でじっくり

こなかったんです。それはやっぱり、100%彼らと同じ立場に立っていなかったんです。

と言いますのは、日本の中世とか、もっと大変なことがあったんだとか。もっと大変なこと、原子爆弾の爆発とか、おまえたちだけじゃないんだという思いがあるわけですよ。実際は、補助金が、がばっと行ったりしているじゃないかということで、ついつい、どこかできちんと受け止めきれなかったんです。

ところが、この前の、ある東北の学者さんの、ああ、差別されていたんだという一言が、僕の気持ちを、ぼんと、腑に落ちたというか、やっぱりそうだったんだと。

あのとき、こういう文章を書いた20何歳の学者さんがいます。ご存じだと思いますが、開沼博という若手。彼の心。正確ではありませんが、こういうことを言っています。

「成長、近代化のプロセスは、常に新しいものを更新する過程だ。そこから忘却がでる。右肩上がりではない、東京なるものがよいという価値観の見直し。ポスト星条旗ではなかろうか」

彼は、今年のノンフィクションのいいところの賞はほとんどかささらっています。やっぱりいろいろなことが大きく胎動しているという。

どこかで、共通しようと、ずっとつなげていかないといかんということもある。けれども、どこかで段差がある。どうしようもない、これを取り返すには。原発だって何万年とかかるわけですから。核なんていうのは、人間はこれをどう責任を負えるのか。ほかの動物に対して。ちょっと暗たんとするところで、本当に立ち向かおうと思っております。

実は皆さん、年配の方が多くて、僕は無事にこの病気は克服したんです。僕は肝臓がんの再発で、手術を10回しているんです。

だけど、まだいけるぞ、やるぞと。東北のこと、これは大きな課題だと思って、きのう来たんです。今日こちらへ伺っています。気力は落ちてはいないので、なぜ気力があるかと言うと、皆さんの顔を拝見できているからです。そっちから電流が流れるから、お返ししているわけ。僕自身からは、いまできないんですね。

だけど、そんなことで呼びしていただいて。今日は本当、鎌田さん。僕は鎌田山脈列島だと思っている。つまり彼の友人、知人がたくさんいる。そこで新しい、いまから永続的に続いていく日本の未来、世界の未来を、何とかお互いに何かやろうと集まってきて、各自、それぞれ爆発するわけです。

ですから、ここには何とかはせ参じて、また役割が果たせればいいなと思って来たんですが、果たせたかどうか分かりませんが、ちょっとそういう状態なものですから、失礼を致しまして。

皆さんの顔を拝見している限りは、いくらでも元気になるんです。

○鎌田 どうもありがとうございます。

○大重 そんなことで、ちょっと、きのうからね、鎌田さんのところへ行くたびに、飯も喉を通らない。今朝も、がんの患者さんは分かると思うんですが、朝の2時からトイレに6回行ってきました。もう体を制御できないんです。

そういうことをしながらということですので、ちょっとだけ中座させていただきます。すみません。ありがとうございます。

○鎌田 ありがとうございます。大重さん、くれぐれも無理をしないように。ずいぶん今日も講演の際、途中で息切れをしていたじゃないですか。皆さんの集中力というか、とても熱心に聞いてくださるので、非常に強い思いがにじみ出てきたんだと思いますが、そういう思いを持って語れば語るほど、気力は盛んで心も魂も非常にクリアであっても体には負担が来ますから。体は正直です。これは摂理です。体と心は非常に密接に関わっていると同時に、体は体の原則という部分もあると思います。やはり痛いものは痛い。心の中でいかにその痛みを止めようと思っても、心頭滅却すれども火はやはり熱いわけですね。熱くないという境地まで持っていくには相当な瞑想や修練が必要です。ともかく、くれぐれもお気をつけて。今日は体調不十分の中、本当にありがとうございました。もう一度大きな拍手をお願いします。

さてここから、最後のディスカッションのコーナーは、大重監督抜きで、でも、彼の魂と共に進めたいと思います。

ということで、先ほど、いのちと魂の循環ということをお話をされましたので、まず最初に、やまださんからお話をいただきます。お二人の発言、あるいは、大重さんの発言に対して、何かコメントや質問がありましたらお願いします。

○やまだ いのちの循環と言うか、魂の循環と言いますか、あるいは再生ですね。そういった自然現象が春夏秋冬とサイクルしていると、私たちはたぶん見ていると思うんです。

冬になると、植物も、葉もそうですが、枯れてなくなるんですけども、それがまったくの死ではなくて、春になるとまた再生してくるといって、そういった自然に対する循環的なものの見方と、自分たちの人生、人間に対するものの見方というものを、私たちは、わりと一体化して、考えてきたのではないのでしょうか。

それが昔の古いイメージというだけではなくて、あるいは幾つかの祭りに残っているイメージだけではなくて、本当に現代の科学時代に育った大学生に描いてもらったイメージ画でも、そういった絵が出てくるといって、かなり根深いところで私たちはそういう「いのち循環」のイメージを大事にしながら生きていっているのではなかろうかということも、一つは補足したいと思います。

今日は、とてもわくわくしながら、下鴨神社、上賀茂神社の普段聞けない話を聞かせていただいて、本当にとてもうれしかったです。たくさん質問があるんですが、時間の制約がありますので、一つにします。

下鴨神社の嵯峨井さんに。非常に印象的なのは、やはり母と祖父です。沖縄の祭りは女性が神人になるのですが、普通ですと母親より祖父の方が偉くて、女性の方、玉依媛の方が下になるという感じですが、実はそうではなくて、対等というふうに考えたらいいのでしょうか。それとも、母親の方が基だと言ってもよいのでしょうか。女性との関係ではどうなのでしょう。

○嵯峨井 神社の建物は、位置的に言いますと、向かって右が上なんです。向かって左は2番目なんです。その論からいくと、娘さんの玉依媛が1番です。

○やまだ 1番ですか。

○嵯峨井 2番目、向かって左が玉依媛のお父さんですね。上賀茂神社から言うとおじいちゃんですね。そういう意味では、先ほど言いましたように、賀茂御祖という名前、「祖」は母である。祖を「おや」と読ませているわけですけども、そういう意味から言うと、娘さんを上に立てているような感じ。でも、今日私がお話ししましたように、お祭りは東西対等に、お供えは上げ、下げるときは下げ、宮司は真ん中で祝詞を読みます。そういう意味では対等ですが、そこがちょっと。

先ほど鎌田先生がおっしゃったように、「齋院」の問題もありますが、鎌倉時代の初めに、礼子内親王で途絶し、それから復活していません。

「齋王」とは天皇の娘さんの内親王に決まっていますから、戦後になって民間から代わりとして「齋王代」というものを決めたんです。じゃその間、断絶かということ、そうでもないんです。社家の娘さんが、「忌子女」として入っているんです。一種の齋王代理だと思いますが、でも、まあまあ表向きは男ばかりの行事ですけども、決して女性を除外しているわけではありません。

○鎌田 ちょっと補足させていただいていいですか。『古事記』の中で、先ほどのやまださんのお話の中で、復活というテーマが出てきましたね。循環とか、いのちの巡りとか。

そのことが書かれている部分は、大国主の神話です。出雲神話です。その大国主神が、兄神たちに嫉妬を受けて殺されます。それも、2回も。2回も殺されたときに、御祖の神の力を受けて復活を遂げます。そのときに、アカガイとかハマグリとか、貝の中に入って、母の乳汁によってよみがえるという非常にシンボリックな描かれ方をしているのです。

そのときの御祖の神というのは、母のことです。だから、先ほども嵯峨井さんの話にも出ましたけれども、「祖」と書いてありますけれども、『古事記』という日本の一番古い古典の中に、はっきりと「祖」は母であるとあります。先ほどの下鴨神社の祭り方も、上位に母親、そしてその下位と

うか、次位の位置におじいさん、男性神が来ているというのは、そういう意味では理にかなって
いますね。この点、補足させていただきました。

○やまだ 私は、『この世とあの世のイメージ』の前には、「母なるもののイメージ」を研究テーマ
にしまして、『私をつつむ母なるもの—イメージ画にみる日本文化の心理』（有斐閣）という本
を書いています。

要するに、日本の文化の中に、「私」というものを包み込むような母親のイメージ。それは人間と
しての母でもあるし、自然、山なども、ある種の母として見ることができるかもしれません。そう
いったイメージが、実は非常に大事ではないかと思っていて、いまの「母」というのが大事な
イメージであることを伺って、とても共鳴するところですけども。

私の資料で、もう一つ、江戸時代の御蔭神社の古図（前掲 24 頁の図 3）がありますが、これも御
蔭神社が山に包まれているように描かれているのがとても興味深くて、母というのが人間でもあり、
自然の母でもあるというようなイメージが、もしかしたらあるのかもしれないというふうに思
います。この図を見ると、本当に包み込まれるように描かれていて、地理的にというよりは、包まれ
ているイメージがあるのではないかと考えています。

お名前がたびたび出てきました、比嘉康雄さん、沖縄のフィールドワークをしておられた写真家
との出会いも、実は、「母なるもののイメージ」がむすびつきでした。比嘉さんも、母というものが
基にあるような、そういった沖縄の集落のつくられ方もあり、母のイメージが大事だということ
をフィールドワークの中から考えておられて、そこで共鳴して出会ったわけです。

今回、そういうところも共通点として考えられるかなというようなことが分かって、大変興味深
く拝聴致しました。

○鎌田 ありがとうございます。では、続いて嵯峨井さん、よろしくお願ひします。

○嵯峨井 先ほどの大重監督の話を聞いて、あらためて沖縄のことがよみがえってきます。私も 50
歳を過ぎてのめり込むようなその魅力にひかれています。斎場御嶽せいふこうたきに行ったり、御嶽は 20 カ所ほど
回りました。まだまだ男性の入れない御嶽もあり何百という数になるそうです。

そこでいつも思うことは、私は本土の神主ですけども、あの御嶽へ踏み入れたら、社殿がない。
石があるだけ。こんもりした森がある。私どもの現在の神社のルーツを見るおもいがしました。戦
前から柳田、折口が飛行機で飛べない時代に、琉球詣でをしているわけです。あの先達が、なぜ
ああいう困難なときに渡ったのか、本当にいまになって分かるという気が致します。

いまの私どもの神社は建築、神殿ですね。神社建築史の黒田龍二さんは「あなたたちのいる式内
社一『延喜式神名帳』に載っている神社の半分は、ひょっとしたら、国家が『延喜式神名帳』をま
とめたときに、社殿がなかったかもしれませんよ」と言われ、ちょっと驚きましたが、ああ、そう
かもしれないと思っています。

確かなことでしかものを言わない建築史の世界から言いますと、そういうことになるとするん
です。たとえば大神神社は、いまもって社殿はありません。石上神社は明治になって、宮司の判断で
禁足地を掘って、出土した剣をご神体になっているんです。禁足地の例として丹後の出石神社、能登
一宮の気多大社、とあげればいっぱいあります。各所に足を踏み入れてはならない禁足地があるん
です。何があるか分からない、しかし聖域なんです。

話を元に戻しますと、御嶽を見て、あっと思ったのは、私たちが今『出雲国風土記』など、風土
記の時代の神社景観が御嶽にあると、私はこのごろ思っています。社殿はなくてもいいんだと。箱
物は要らない。神の鎮まる森、石、ガジュマルがあればそれでいい。

そういうところが神社の根源的な原型と言いますか、共通点が多いですね。頭にかぶりものをし
た映像を見せていただきました。伏見のお稲荷さんは、ヒカゲノカズラを頭に巻いて稲荷山を登っ
ていく。先ほどの葵かざらで飾る。要は神草です。神様の草と言ってもいい。生身の人間が植物を
持つと神なんです。あれは神を招く。よく舞台でありますね。お能で採物を持ったらもう神、神
を招くから神なんです。そういうのを見ると、神道のもつ原型というものは、そういう自然の中に

あるという。

たとえば沖縄のビロウは扇のルーツといわれますが、やはり神と交歓するときに、それがわれわれにとって、村松さんがおっしゃったように葵ですね。会いたければ葵で飾れというような、神のご神託で言っているのではないかと思います。

私どもはどうしても、儀礼中心です。先ほど神道に「バイブル」がないとおっしゃいましたが、その通りです。説明がなくてカタチ、儀式で表現される。

それを言葉化するということは、われわれは下手ですが、こういう時代ですから、やはり言葉で表現して、根源的な神と人との関わりというものを語らなければならない地点に立っている。そういう意味では古典に依拠しながら語りたい。広く眼を拓げれば琉球の斎場御嶽、あそこで僕も座り込んでしまいました。そういう御嶽がいっぱいあります。

先ほど、大重監督のお話を聞きながら、あらためてそのことを感じました。葵・カズラは決して単なる草ではありません。たかが草、その草が何なのさ、と言えます。しかし葵は神草である、その草がもつ自然性、さらにいうなら賀茂大神の霊力を有しているとおもいます。

ちなみに、葵祭は葵かざらを身に着けませんかと参加できません。そういうことが起きて、やっぱりそういうのは大事な点。ですから先ほどおっしゃったように、葵プロジェクトを立ち上げられたと思います。下鴨神社で5千本ぐらい使います。御所へも提供しますから、両方全部で1万本超えていると思いますね。残念ながら採っているところは言えません。京都市の北部で、土地の方に生き生きした葵を、朝、あるいは前日届けていただいている。もうただ同然です。本当に頭が下がります。たかが草ではない、籠められたものは極めて尊いと思います。

○鎌田 いま嵯峨井さんが言われましたけれども、手に植物を持つと神になる。あるいは神を招くことになる。これは能の採物にも共通しています。沖縄でも同じです。葵祭も、手ではなくても頭に、また手に持っても、そういう象徴性があるとおっしゃいました。

『古事記』の中にまったく同様の記録があります。天の岩戸の前での神事のところにはっきりと出てきます。アメノウズメノミコトという女神が神懸りになって踊りを踊るのですが、その場所に、「天香具山の榊を根こじにこじて」、根っこから掘り出して天の岩戸の前に置いて、そこで踊りを踊っているうちに神懸りとなり、トランス状態になっていくわけです。まずそこに、常緑樹の、永遠の生命を象徴する植物を立てた。それも、途中から幹を切ったものではなく、根が付いたものがそこに置かれた。これは、生命の大きな循環を象徴していると思うんですね。

そのとき、ただ大榊がそこに立ててあるだけではなくて、アメノウズメノミコトが手に笹葉を持って、髪にかざらを着けて踊りを踊ったのです。ということは、ほとんど、体中植物だらけということですね。私はグリーンマンですが、アメノウズメノミコトはグリーンウーマンのような状態になって、生命を復活させていったのです。

そこは非常に根源的な祭りの象徴性や意味性があると思います。ヨーロッパにおいても、ゲルマンやケルトには同じようないのちの祭りがあると思います。

さて、上賀茂神社の村松さんは、私はずっと10年ぐらいお近づきになっているんですけども、名前が間違っていたのに、いま指摘されて気付きました。この公開の場で心からおわびして訂正させていただきます。いままでずっと10年ぐらい、村松晃男（アキオ）さんと呼び続けていたんですが、アキオさんではございません。テルオさんですね。

○村松 はい、テルオでございます。

○鎌田 それでお聞きしたいんですけども、やまださんの出された古地図についてです。御蔭神社の古地図は、八瀬の川と谷川という二つの川の合流点だし、もう少し下流に行くと、もう一つ、谷間から川が流れています。まさにここは川で、水に取り囲まれているのが非常によく分かります。それから、嵯峨井さんの写真でも、糺の森がちょうどきれいにY字型になっていて、高野川と鴨川が合流しているところだということがよくわかります。その合流点の真ん中に糺の森があります。

さらに、その糺の森の中にも二つの川がありますね。あの森の中にも、さらに小さな川があつて

その瑞垣に囲まれています。そして、村松さんの示された古地図でも、賀茂川が左側にあって、右に社殿がありますが、その社殿は、御手洗川と御物忌川の二つが合流しているところに建てられています。つまり、水、清流によって取り囲まれているという点において共通しています。

沖繩は島ですから、こんな大きな長い川はほとんどありません。川はないけれども、御嶽には必ず「カー」と言って、泉や井戸があります。つまり、湧水や清水のあるところが御嶽になっているのです。ですので、日本列島至るところで、清らかな水が湧かないような聖域、聖地はないと言えます。

そこで、水の上流から桃太郎のように何か、聖なるものが流れてきて、それが神様ですが、賀茂神話の場合、そこに丹塗矢が流れてきて、桃太郎の代わりに、その矢が新しく誕生する別雷という神様になっていって、この水というものと、再生、循環が結び付いていると思うのです。

同時に、航空写真で、レントゲン写真のように見ると、京都は、近畿地方で水の埋蔵量が一番多いところだそうです。御所の下などはプールのような状態だと言います。だから水に関しては、京都の水資源は大変豊かであるということが証明されています。

そういう京都・平安京の信仰の一番の中核である水への畏怖畏敬を表現しているのが、上賀茂、下鴨両社ではないかと思うんですが、そのあたりのことも含めて補説をしていただければと思います。競べ馬、競馬のことも。もう少し普遍的に象徴的な意味合いがありましたら、お話しいただければと思います。お願いします。

○村松 あらためて、村松晃男^{てるお}でございます。いままで言っていないくてごめんなさい、すみません。特に気にしていなかったものからです。

○鎌田 いや、名前には言霊があるから。

○村松 先ほど、やまだ先生もおっしゃっていた女神というか、母神様のことなんですけれども、実は、上賀茂神社には恒例祭が年間に七十数度ございます。今日の新嘗祭も、もちろんそうですが、ご本殿で宮司が祝詞を奏上する前に、必ず母神様に祝詞が上がります。

ご本殿の手前、楼門の前に御物忌川が流れています。川をはさんだ向こう側に、片山御子^{かたやまみこ}神社が鎮座しています。第一摂社で、ここには母神様の玉依媛様をお祀りしています。ここで先ず、これからご本殿で神事を行いますという祝詞が奏上されます。

片岡御子神社で祝詞が奏上されましたら、神職が大声で「片岡の社の祝詞」と叫びます。丁度、ご本殿で宮司がゆっくりと祝詞の座へ歩いていくところに「片岡の社の祝詞」という声が響いてくるんです。そして、宮司が祝詞を奏上致します。

ですから、お母さまに必ずごあいさつをしないと、ご本殿で神事が進みません。たまに宮司が先に祝詞座についてしまうことがあるのですが、声が掛かるまでじっと待っていて、声が掛かると祝詞を奏上致します。必ずお母様を第一に考えています。

○やまだ 面白いですね。

○村松 ご本殿の方も、上賀茂神社の場合は独特で、ご祭神がご鎮座になるご本殿と、もう一つ、同じような建物が左側にあるんです。古絵地図を見ていただいたら分かるように、御殿が二つ並んでいます。

向かって右側の方がご祭神を祀る本殿で、左側の方は権^{ごんでん}殿と言います。これは仮の御殿という意味で、こちらには、神様をお祀りしておりません。

平安時代の初めに今の姿が整いますが、それ以前はこの御殿の後側にも扉があったと伝わっています。その昔、お祭りをするときは、手前側の扉と向こう側にある扉を開けて、はるか向こうに見えるご降臨山の神山を見てお祭りをする。つまり遥拝殿でした。

神様は向こうにいらっしゃって、ここでお供え物をする、この建物を通して、はるか向こうにいらっしゃる神様をお祀りしていたようです。

そして馬について一つ、ぜひ皆さんにお話ししたいと思っていたことがございます。

葵祭というのは、競馬で始まって走馬で終わるのですが、もう一つ馬が走る場所があります。

どこを走るかと言うと、御生所に向かって山を走ります。競馬は、高度なテクニックを使って走るのではなくて、魂で走るんですね。魂をバーンとぶつける神事です。

そして走馬は葵祭の日に、先ほど映像でもご覧になったと思いますけれども、参道を一頭ずつ馬が走って行きます。しかし正面は鳥居です。鳥居を潜れませんから、ほぼ直角に左へ曲がります。テクニックが必要です。曲がり終えて馬は止まります。みなさん、これで葵祭は終了と思っていらっしゃるんですが、実はその後、御生所がある山に向かいます。辺りはもう薄暗くなっています。

先ほどご紹介した『賀茂旧記』で、「われに会わんとには、鉾をささげ、走馬を飾り、奥山の櫛を阿礼に立て・・・」と言っています。走馬を終えた馬が御生所へ向かう道を神山の方に向かって走ります。そして、神山に向かって馬が駆けて行くうしろで、神職がひれ伏しています。境内がすっかり静かになったころ、葵祭が終了致します。人々の神に対する素朴な姿、思いというものが見えてきます。

馬で始まって馬で終わる葵祭です。

○鎌田 そのこのところなんですね、私に関心を持つのは、葵という植物と、馬という動物。この二つは、命があるものです。葵は優しい。和御魂的。それに対して、馬の方は荒御霊。非常に新しい、荒々しい。そういう側面を持って登場してくる。上賀茂神社の辺りに、そのこのところが非常にはっきりと鮮明に打ち出されています。

これは私の解釈ですが、馬は神そのもの、雷だと思うんです。別雷の靈性。だから、雷の姿で表される神の威力、ちはやぶる神が、ではどういふかたちで表現されるかと言ったら、その当時あったものの中では馬が一番人間世界の中で雷的なもののシンボルとして、メタファーとして移し替えてられるものだったのではないか。

そこで、祭礼は、馬に始まって、馬に終わる。そして日本のあらゆるところでも神馬を引く。雨乞いするときも、雨を止めるときにも、馬をささげて、祈雨（降雨）・止雨の祭りをを行う。祈願を行う。こういう、馬を用いた祭りが各地で行われていくことの一番象徴的な意味合いは何だったのかということを考えなければなりませんね。

それが一つ。それからもう一つ。では、欽明天皇の御代に、何でそれが突然そういうようになったのかと言ったときに、村松さんが先ほど言われました、仏教の導入というものが影響しているのではないか。これも非常に大きい問題だと私は考えています。

仏教がやってくるというのは、確かに『古事記』や『日本書紀』を読むと、新しい隣の国の神様がやってきて、日本に入ってきたということがあるけれども、土地の物部氏とか、あるいは中臣氏とか、在来の神を祭る一族たちとの間に、ある種の権力闘争、特に蘇我氏との権力闘争が起こってきます。はい、そうですねと言って、すんなりとして入ってきたわけではないわけですね。

そういう欽明天皇の時代に、新しい文化というか、宗教改革があつて、新しい宗教の形態、信仰の形態が生まれてきたときに、最も古い神がそれについて、「もの申す。我らをちゃんと祭れ」と現われ出たのではないか。

では、私たちが祭るときに、どういう祭りをを行うかと言ったときに、馬だということになった。それが縄文にもつながると思うのです。というのも、イノシシが出てくるでしょう。嵯峨井さんの示された賀茂祭の創始に関する『山城国風土記』の記事に「馬は鈴をかけ、人は猪の頭を蒙る」とあります。

これは、『もののけ姫』を思い起こさせます。『もののけ姫』は「シシ神」を殺すアニメーションですが、「オッコトヌシ」というイノシシの神が登場してきて、人間がイノシシの頭をかぶって化かしながらシシ神に近づいていって、最後は鉄砲で撃って殺すわけです。

結局、イノシシのかたちをすることは、『もののけ姫』などの単なるアニメの話だけではなくて、宮崎県の銀鏡神楽の祭りや諏訪大社の祭りなど、古い日本の神事や習俗にその原型があるのではないかと思っているわけです。

そこで、ものすごく勢いよく走る馬やイノシシが、動物の中でも、とりわけ、ちはやぶる威力の

あるものとして選ばれてきているのではないかと思うわけです。それがコメントです。

もう一つは質問ですけども、歌です。神山のところで、非常に神秘的な2時間にわたって、沈黙の中で祭りが行われる。私が聞いた沖縄の祭りもそっくりで、祭りの日は決まっていないそうです。ああ今だ、と感応して行って、祭りがだいたい決まっていく。

そういうように、いわゆるこの日が祭りだと決めないで、占いであるとか、何かの勘で祭りが決まっていくプロセスがあると言います。先ほどの、沈黙の中で粛々と物事が進行し、そしてひたすら祈りの歌がひたひたと唱えられている。沖縄では、それは女性が主でしたが、賀茂の氏人というのか、神人たちは男性かと思うんですけど。

○村松 男性ですね。

○鎌田 けれども、古くは男性ではなくて女性が中心になって歌を歌い続けて、一夜を過ごすことがあったのではないかと想像するわけです。その辺のことについて、神人、氏人なるものはどういう存在かをお聞きしたいと思います。

○村松 はい、非常に難しい質問ですけども。

○鎌田 公開してはいけないところは構いません。

○村松 はい。非常にセンシティブなところがあるのですが。

上賀茂神社に奉職すると御阿礼神事を奉仕する事ができます。どなたも見ることができないお祭りです。

奉職して3、4年たっても、私はいったい何をしているのか。通常のご神前で儀式をする姿とはまったく異なったことをそこでするものですから、いったい何をやっているのか全然分からなかったのです。

そしてやっと、先ほどの『古事記』のお話がありましたけれども、神様をお迎えする決まり事を、シンプルに表しているのではないかと思うようになりました。

その中で、神様をお迎えするとき、神人はぐるぐる回るんです。

○鎌田 サークル、円陣で。

○村松 はい。トランス状態になって行くのでしょうか。そのような状況を神職は導いて、そこに神様をお迎えする。その方々がパワーアップした状態になったところに神様が降りて来られます。

○鎌田 非常にその辺のところ、上賀茂神社の神山での御阿礼神事というもの自体が秘儀とされていて、例えば、伊勢の神宮の心の御柱のときの神事と同じように、その秘儀が公開されていないし、語ってはならないというところがあるので、なかなかデリケートで、センシティブなところだとは思いますが。

けれども、いまちょっとお話を伺っただけでも、古代から伝わっている祭りの核心がどの辺にあるのか。沈黙の中で、静まった闇の中で、そしてひたすら祈りが歌として歌われているということ。

おそらく神様をたたえる歌とか、神様をここにお招きするときの歌だと思うんですが、そしてぐるぐる回るというのは、アメリカ先住民もそうですが、基本的に円陣で、サークルで回るといっては至るところにあります。

そういう中で、そこに、神様が降りてくる。そして神様と共に、神職も神人も一緒になってお社に戻ってお祭りする。それは、5月12日の夜ですね。15日にいわゆる路頭の儀とか、社頭の儀という行粧の華やかな行列、表の祭りがあります。

でもその前に、裏というか、奥の祭りがある。その裏や奥の祭りと、表の祭りの両方が組み合わさっている。そしてそれを貫いていくのが馬であり、競馬。そしてそれを象徴するのが葵。こういうふうな構造が葵祭の中から浮かび上がってきて、そこに京都の伝統の「ワザ」がある。祭りのワザの中に込められている。では、そこにどういう「こころ」があるのかを、われわれはそこをしのいで、いろいろと問い掛けて考えていくことができると思います。

その問い、意味については、皆さん、お一人お一人も考えていただくとして、残る時間が10分ほどございます。ここで質疑応答をしたいと思います。もし質問等ありましたら、せつかくの機会で

すので、聞けないことまで聞いてしまうということがあってもいいかなとも思いますし、お見かけするところ、非常に珍しい方も来られているので、ぜひ。

ありがとうございます。外国人の方が先に質問していただけるとはありがたいことですね。よろしく願います。お名前と自己紹介を簡単にしていただけましたらありがたいです。

質疑応答

○質問1 マーク・テーエンと言いまして、ノルウェーのオスロ大学で、日本史、神道について教えている者でございます。

一つ聞きたいことは、下鴨神社の縁起、『山城国風土記』逸文を読みますと、一番先に出てくる言葉は、たたりですね。たたりがあつて、それでお祭りするという構図になっているかと思ひます。

それで思ったのですけれども、神道の方もいろいろ読んでいるうちに、神は自然の恵みの象徴として人々の生活を潤すという言い方がよくあるんですけれども、たたりということはあまり言われなくなったという気がしてきて、それはどうなんでしょうか。

それについて、二つぐらい質問があるんです。一つは歴史的に見て、古代にさかのぼっていくほど、たたりの面が多くなって、現代に近づいてくるほど神の牙が抜かれて、恵みを強調してくるのかなという印象を受けましたけれども、いかがでしょうか。

もう一つは現在、今年は震災や、いろいろあったんですけれども、それを神の仕業に結び付ける流れもあるのでしょうか、そういういわれもあるのでしょうか。そういうことについて質問します。

○鎌田 ありがとうございます。ノルウェーのオスロ大学のマーク・テーエンさんから質問です。では、下鴨神社の嵯峨井さんと、上賀茂神社の村松晃男さんお答えいただけますか。

○嵯峨井 3・11の震災後、これを契機に祟りというのは、われわれの神社界でも議論されています。たとえば震災直後に、たたりだと言った著名な知事さんがおられました。もちろんすぐ発言を撤回されました。珍しく素直に謝られました。しかし、あの発言は、一面、半分本質を突いていると思うんですね。

神様のたたりというのは、一つの、あるべきではない、あるいは異常なことの神様の神意の表現形態と見るのが、やはり古代的、伝統的な日本の神の現れ方だと思います。

では、神様がそういうことを認めているかということ、それはまた別問題ですが、大変微妙ですが、たたりと恵みは、確かに表・裏ではないんですけれども、両方併せ持っている。それだけに怖い、謙虚にならなければならない、畏怖とはそういうことだと思う。人知を超えた力、ちょっときれいごとですけれども、私流の、神道の一つの考え方だと思います。

近代文明の世の中に、私どもはそういうことは口ごもってしまいます。でも仲間内では、おまえ、たたるぞとか、言いがちです。私なんかは特に言うんですけれども、こういう普段着を着ますと、あまり言いませんが、白衣を着ると内々では実は口走ってしまう。

○鎌田 今日秘密公開をしていただいてありがとうございます。では、村松さん。

○村松 私が思ひますのは、では神様というのは、いったいどのような存在なのか。私たちは、大自然の中に生かされている、その大自然そのものが神々である。すべてに魂がある、つまり八百よるずの神々が私たちの世界。

では、神様のたたりというのは、いったい何なのかと言うと、やはり、そうした神々に対して、大自然に対して、私たちの思いが至らなかったことが、たたりだろうと私は解釈しています。地震がたたりによるものだという事、それはイコールだと思っています。

○鎌田 よろしいでしょうか。ではどうぞ。

○やまだ たたりという言葉の語源はいろいろあると思うんですけれども、「神立ちてあり」というふうを考える場合もあつて、雷もそうですけれども、本来は、恐ろしい面と、恵みをもたらす面と、両義的なものだったのだらうと思います。

ですから、本来は、非常に恐ろしいというか、畏怖する相手。だから、本当に怖いものである。

自然というものの怖さというものが一面にはあったのではないかと思います。

いまは畏怖の念が薄れていて、恵みの方ばかりを、私たちは信じているのではなからうか。本来自然というものは両面を持っているものではなからうか。それがたたりでもあり、恵みでもあるということではなからうかと思ひます。

○鎌田 ありがとうございます。京都のワザを發達させてきたのは、私が先ほども言いました、水、特に鴨川だと思ひんですが、鴨川は暴れ川で、非常に怖い川でもあった。同時に恵みをもたらしてきた。鴨川をなくして京文化は、やはりなかった。

神饌も、あるいはお酒も、鴨川の水、もちろん桂川もありますけれども、この水によって形成されてきて、水は氾濫することもある。特にこういう急峻な坂とか山とか、谷とかが多いところでは、一挙に水がだあっと流れてきて洪水化するということはしょっちゅうあった。

そういう中で、それを恐れ、敬って、上賀茂神社、下鴨神社の信仰がこれほど強烈に勅祭として行われたのは、五穀豊穰を願うとすれば、その神様の荒ぶりが少しでも和らいでくださいますようにという祈りがあったと思ひます。

私は、よく古典をひもときながら考えるんですけども、神様の枕詞は「ちはやぶる」ですね。「ちはやぶる」ということ自体が、非常に荒々しいエネルギー、先ほども言いました、荒御靈的な性格が、やはり神の根幹であるという考えがあったということだと思ひます。

和御靈というのは、荒御靈が出てきた一面が和御靈のようなもので、荒御靈的なものが奥にどうか、根っこにあるのだと思ひます。

それは人間生活の中では、それは同時に恵みをもたらしてくれたり、それが人間中心主義になると、その荒ぶりをどうやって人間的な意志でコントロールするか、あるいは技術でコントロールするかということになると思ひます。

原子力發電も、基本的には人間がコントロールできるという思いあがり、やはり文明構造として大きくなっていった。ところが自然というのは、人間の想定や技術を超えて、もつともつ大きい、ちはやぶる状態を持っている。これが基本的な神道の考え方ではないかと思ひます。

同時に、「いのち」の枕詞が、「たまきはる」です。だから「命」とは、魂がやってきて、そこで膨らんで通り過ぎていくものである。そういうような、「たまきはるいのち」という枕詞の中にも、命や神というものに対する古代人の心性、ものの考え方、コスモロジーがあって、そういう言葉の感覚がどこかに私たちの中に今なおあるように思ひます。

ですから、やまださんの発表の中の「いのち再生」とか「いのち循環」と言うときのいのちと、生命再生とか、生命循環と言うときには、やはり、語感的に日本人は、また違いを感じます。

「生命」と言うときには、何か技術的な、科学技術と合理的なものと結び付いた感覚になります。けれども、「いのち」と言うと、もっとぬくもりのある神秘的なというか、古代から伝わっているような存在感覚がやはりあると感じる。

では、もうお一方、もし質問等がありましたら、お聞きしたいと思ひますが、いかがでしょうか。はい、どうぞ。先に手を挙げていただいたので、すみません、後ろの方。

あした発表していただくこととなります、皆さまのお手元でございますが、第二部の講演、大重潤一郎、須藤義人、そして坂本清治さんと続きますが、その坂本さんが手を挙げてくれましたので、では、最後をお願いします。

○坂本 すみません。馬について、大重さんがいたら、おっしゃっていたのではないかということをおし上げたいと思ひます。

沖繩に数十年いまして、私などより一世代上の人たちが、井戸にお母さんたちが集まって作業をしますね。そこは先ほど鎌田さんがおっしゃったように、聖地です。その聖地に馬に乗った神様がよく来ていたんです。最近見ないねというのが、私などの一世代上のお母さんたちが普通に言っていました。

久高島に10年ちょっと住んでいて、久高を扱った古い映画で、『カベールの馬』というのがあります。

ます。カベルというのは、久高の聖地の一つですが、そこに神様が馬に乗って来る。恐ろしや、恐ろしやという出だしで始まる映画です。

余談ですが、私が「久高島留学センター」を立ち上げたときに、与那国馬をプレゼントしたいと言ってくれた人がいるんです。島の人に聞いたところ、坂本さん、馬だけは勘弁してくれと。神様の乗り物だから、馬はこの島では飼わないでくれと言われました。

もう一つ余談ですが、では、イヌは飼っていいかという、イヌはあの世の使いだから飼わないでくれという。

○鎌田 ネコはどうですか？

○坂本 ああ、ネコはいっぱいいますね。どうも失礼しました。

○鎌田 ありがとうございます。坂本さんは、あしたは40分ですが、ここにありますように、「久高島留学センター」で、日本全国から小学生、中学生と一緒に、四六時中共同生活をしながら、久高小学校、久高中学校に通わせて子どもたちを支援し、一緒に育てていく活動を、もう10年以上されております。ぜひ聞きに来ていただければと思います。

もう時間も過ぎてしまいましたが、あと、これだけはちょっと一言伝えておきたいというのがございましたら、パネリストの皆さまからいかがでしょうか。なければ、これでよろしいですか。

それでは、今日「ワザとこころー葵祭から読み解くー」というテーマでシンポジウムを行いました。京都に住んでいて、皆さまも本当の本当の核心にある上賀茂神社、下鴨神社の一番根っことか、奥に何があるのかなというの、表ではよく知っていることではあっても、1枚めくり、2枚めくり、3枚めくり、その秘められるところにあるものは何なのか、これはなかなか専門家でも知り難いところがあります。

そういうところの一端を今日皆さんにお示しできたのではないかな。それを通して、京都に伝わるさまざまな文化、外来のものも当然たくさんございます。そういうものの中で練り上げられていった京都は、日本文化の中でどういう位置づけにあるのかということも、あらためて考え直す機会となりました。

大重さんも入れて4人の基調講演、ミニ講演していただきまして、本当にありがとうございました。

今日のシンポジウムを踏まえまして、明日、さらにもう一步突っ込んで「沖縄・久高島のワザとこころーその過去と現在ー」というシンポジウムを連続で行います。午前中の10時半から大重潤一郎さんの映画『水の心』、これは30分の作品。まさに、上賀茂神社、下鴨神社のところです。世界のヒマラヤから流れ落ちてくる水がどういうふうに世界に至るかということが描かれております。

そして、久高島のドキュメンタリーの第二部、『久高オデッセイ 第二部 生章』。これが午前10時半から12時10分まで上映されます。関心がありましたら、ぜひこの機会に来て、無料で見られるのはここだけだと思います。大学の催しだから見られる。

第二部は、講演が大重潤一郎さん、須藤義人さん、それから先ほど質問というか、コメントをいただきました坂本清治さん、この3人による講演があって、そして今日ミニ講演をしていただいた、やまだようこさんが指定討論者として明日も加わっていただいて、あしたは、「沖縄・久高島のワザとこころーその過去と現在ー」を開催致します。

二日間にわたる催しですけれども、本日は大勢の方に来ていただきまして、本当にありがとうございました。またこういう催しをあしたもちろん行いますが、来年度以降も引き続き行っていますので、またご協力・ご支援をいただければと思います。どうもありがとうございました。

1、大重潤一郎の根源（ルーツ）

大重潤一郎（おおしげ じゅんいちろう）という「映画監督」……。その名を知っている方はどれ程いるであろうか……。映画業界では、岩波映画出身の監督として一目置かれている存在であるが、一般的にはあまり知られていない監督である。地位や賞のような名誉からは縁遠く、社会的な認知度は低いものの、カルト的な大重ファンからは強い支持を受け続けている。

筆者は、大重潤一郎という才能を「ドキュメンタリー映画の奇才」と呼んでいる。大重潤一郎とその映像世界を俯瞰し、そこに眠るテーマ性を描写していかないことには、奇才が埋もれてしまうことになりかねない。彼のフィルモロジーの軌跡を辿ると、自然や伝統文化を主なテーマとし、「人間の根源」に絶えず目を向け続け、今の私たちに如何に生きるべきか……を提示し続けていることが分かる。

まず、大重潤一郎のライフヒストリーを辿ってみることで、コンテクスト（作品背景）が露になってくる。1946年に生まれた大重は、その先祖代々に縁のある土地である鹿児島県坊津にアイデンティティを持っている。その地は、遣唐使の一員であった鑑真が、唐から渡航した際に最初に立ち寄った港である。また、黒潮の流れが、琉球列島から辿りつく場所でもある。「海賊の末裔」を自称する大重は、海に生かされる人間の姿を幼心ながら体感していったのである。彼の映画制作会社の名前が「海プロダクション」（旧名 UMI 映画）であることから、その幼少期の感性が大重映画の根源（ルーツ）となっていることが分かる。

鹿児島県天保山は、大重が2歳から17歳までの多感な時期を過ごした土地であり、この地の風土こそが、彼の望郷心を揺さぶる原風景となった。その土地への憧憬は、大重の「映像作家」として才能を開花させるのに大きな力を与えている。1970年に岩波映画の若手を有志で集め、自主制作の劇映画『黒神』を監督第一作品として、この世に送り出した。この処女作『黒神』における風景は、まさに大重の少年期の原風景と重なるものがあつた。奄美と沖縄の移住者たちが祭りにおいて島唄を唄い、舞い踊る姿は、少年であった大重の記憶に鮮烈に残り、さらに南島への憧れをも抱かせたのである。沖縄への憧憬はこの時に生じたとも言ってもよからう。

2、1960-70年代の軌跡

映画人生のキャリアは、19歳の時、大映作品『スパイ』（大映/1965年）で山本薩夫監督のもとで助監督をしたことから始まった。映画界入り後は、主に、ドキュメンタリー映画や科学映画で定評のある岩波映画製作所で、ドキュメンタリーの演出法を学んだ。助監督として、『地震予知への道』（東京大学/1968年）といった学術映画、また、『シップヤードの青春』（日本造船工業会/1967年）や『大阪万博』（清水建設/1969年）といった産業映画を手がけたのである。映画の師匠として、大重が師事したのは神馬玄佐雄（じんば いさお）であった。また映画人として親交のあつた先輩、黒木和雄とはその時期に知り合った。

1970年には、岩波の仲間達と自主制作で劇映画『黒神』（自主映画）を完成させ、翌年から全国をまわってホールを借りつつ自主上映を展開した。1972年には記録映画『能勢』（自主映画）を制作し、ミサイル基地建設の反対運動を後押しするのに一役を買った。同年制作の環境問題を扱った記録映画『かたつむりはどこへ行った』（伊丹市）は、地方自治体の反公害映画として位置づけられ、大重ドキュメンタリーの礎石となる。すなわち、川を源流から下って撮影するという表現技法が出来上がったのである。猪名（いな）川の源流の原初的な場所から生まれた水が、下流に向かうにつれて、人間の自然への過度な干渉によって汚されている状況を描いた。ありのままの風景を淡々と記録することで、ぜんそく患者を生み出した人間の「人為的な業」を問うてゆく。

環境問題に敏感であった大重は、1974年には大島渚と出会い、ビキニ環礁の水爆実験前の姿を取材する企画を共に温める。だが結局、実現には至らなかった。さらに大重は、次世代へと叡智をつなげるものとして伝統工芸に着目し、『みすや針』（読売テレビ/1974年）や『木地師』（読売テレビ/1975年）

などを記録していった。また着目すべきは、1977年に『AIZU HOLIDAY』（読売映画社／日本貿易振興会）というドキュメンタリー映画を海外向けに発表したことである。この作品は80をこえる国々で公開され、当時、「エコノミックアニマル」と揶揄されていた日本人への偏見を払拭する内容であった。会津のお盆行事を重んじて生きる日本人のメンタリティを描き、経済優先の日本人像を覆す映像……。日本人の精神性の元型を捉え直し、外国人向けの対外プレゼンテーションを意識したものである。

1970年代の大重の足跡は、反戦運動や環境問題、伝承文化といった様々な素材を映像化することで、大重ドキュメンタリーの普遍的なテーマを模索する時期であった。そして思想的な成熟を遂げる時期でもあった。しかし、劇映画であるものの『黒神』が大重ドキュメンタリーの原点となっているのは忘れてはならない。この作品が無意識的に、自然と人のかかわりと女性原理の社会を描写してゆく……という大重作品の方向性を確定したと言えよう。

3、1980年代の軌跡

1977年から、鎌倉に居を構え、東京で制作会社「JSP」（Japan Science Planning）の会社運営に専念することになる。以降、「JSP」に所属しながら十年にわたって、大島渚の協力を得て、「日本文化デザイン会議」の映画担当ディレクターとして全国をめぐることにもなった。映画人だけでなく、文化人や知識人のネットワークが一気に広がったのもこの時期である。しかし、本当に作りたい映画を作るための会社でなく、映画制作をする組織を守るための会社という在り方に疑問を持つようになった。つまり、会社経営者としての同志たちが、映画の制作活動よりも組織の維持活動に意識が偏っていることに、疑問を覚え始めたのである。

大重は1980年に、それまでの作風とは異質の映画を手がけ、映画監督たちの語り合いを描いた記録映画を作った。それが、大島渚・小川紳介が出演する記録映画『小川プロ訪問記』（博報堂／1981年）である。成田空港の建設反対運動で三里塚に住み込んでいた小川紳介が山形県牧野に移り住んだ7年後、大重が大島渚とともに訪問した様子を記録した映像であった。現地に住み込んで撮影をするという方法は、大重が崇拝する監督ロバート・フラハティが実践してきた手法でもある。後に、大重が沖縄の久高島において撮影する方法は、小川紳介の撮影方法を踏襲したものであった。

1983年には八重山の新城島を舞台に撮影を始める。沖縄復帰の1973年に、初めて沖縄の地に足を踏み入れたものの、沖縄を舞台にした映画に着手したのは、その十年後であった。沖縄というトポス（約束の地）に恋い焦がれ、胸の内に温め続けてきた企画が『PANARI』というタイトルの映画であった。後に『PANARI』の制作構想は、那覇市の制作会社「コンセプト1」と共同で進めることとなり、『風の島』『光の島』の二部作へと形を変える。この制作活動の始まりは、大重にとって、沖縄の自然と文化を撮影する出発点を意味した。新城島という孤島に滞在しながら映画制作を進めるものの、3年目にして島の開発計画のために、途中で撮影が打ち切られるという事態に追い込まれた。さらに編集作業も一時頓挫し、フィルムの完成までには難航を極め、13年という長い月日を要した。

『PANARI』のために制作上の苦闘を重ねながら、それと並行して制作された記録映像も多数ある。その中でも、特筆すべきは『水と風』と『太平洋家族の一員・日本』の二本である。当時の霞ヶ関の行政機関（建設省・総理府）から受注した仕事であったが、大重は制作における権力的な介入を拒みつづけ、独自の視点を貫き通した。そのうちの一本である記録映画『水と風』（建設省）は1986年に制作され、利根川の源流から河口である銚子までの自然を記録した。記録映画『かたつむりはどこへ行った』で培った技法が、『水と風』で開花した一例である。

もう一本のフィルムがテレビ東京特別番組『太平洋家族の一員・日本』であり、翌87年に放映された。日本本土の首都・東京からみれば周縁に位置する沖縄……。大重は、霞ヶ関主導の沖縄振興政策に違和感を覚えたのである。彼の沖縄への優しい眼差しが、クライアントとの激しい口論を招くことになった。依頼主であった総理府の官僚たちと見解を違え、大重一人で異論を唱え続けたのである。彼はウチナーンチュ（沖縄人）の眼差しを重んじ、沖縄の物産流通の開拓者である宮城弘岩、沖縄県知事となる稲嶺恵一の二名の主張を聞き入れ、沖縄のFTZ（自由貿易圏）の矛盾点を指摘する「反・霞ヶ関」の方針を押

し通した。この制作活動は、日本の教育現場に英語教育が入り過ぎたことに危機感を持った大重が、国際化の一途を辿っていた「日本」を内部から解体する試みでもあった。太平洋家族の一員として、沖縄と日本を分離することで、総理府の弱点を突く反骨の精神を映像で表現したのだった。

1980年代の大重作品の遍歴は、沖縄とのつながりを強めつつ、自然の気配をフィルムに写し込むことに暗中模索した時期でもあった。「J S P」という制作会社において多忙を極めたが、幼子であった息子（大重生）の父親として、安定的な生活を送れることに重点を置いた。会社や家庭を堅実に維持しなければならぬ……という意識が、制作活動におけるストイックさを喪失させたのであろうか。この時期に未完の作品が散見できる。例えば、画家・焰仁（ほむら じん）の人生を追ったドキュメンタリー映画『東風』（自主映画）や、青森県深浦を舞台とした劇映画『天の川』、宮沢賢治の一生を描こうとした『銀河鉄道の夜』（講談社／1988年）が挙げられる。これらの作品は、撮影を開始したものの、完成の日の目を見ることはなかった。一方で、新城島をロケ地とした『PANARI』や、沖縄の存在を重んじた『太平洋家族の一員・日本』の制作において、様々な苦悩を重ねながら、大重ドキュメンタリーの表現手法を着実に確立していったのである。

4、1990年代の軌跡

1989年、再び東京から大阪へ拠点を移し、自前の映画製作プロダクションを構えた。現在の「海プロダクション」の前身となる「UMI映画」を立ち上げたのである。上映の拠点のひとつであった神戸に転居することになり、事務所は大阪の中之島に置いた。それ以降、大重は会社経営よりも映画製作に専念するために、映画のプロジェクトごとに、スタッフを集めるという方法をとるようになった。この見本となったのは、かの大島渚プロであった。大島渚から、日本とフランスの合作である『ラ・ファントマ』を制作した体験談をネタとして、映画制作組織のありべき姿を聞かされたのであった。「映画大国」として知られるフランス……。その提携相手のフランス側の制作会社は身軽であり、テキパキと働く中年女性一人だけしかオフィスにいなかったという。それは、「J S P」という組織のために奔走していた大重にとって、「映画製作は大きな制作会社がバックアップすることで成り立つ」と信じていた思い込みが脆くも崩れ去った瞬間でもあった。映画製作という仕事は、何も常駐スタッフを多く置かなくても遂行できると確信したのである。

1990年代は、新天地であった関西地域において、テレビドキュメンタリーを中心として制作した時期である。アナログ思考の強い大重であるが、最先端の映像機材の活用にも力をいれ、関西地域でのハイビジョン作品も先駆的な役割を果たした。当時はトラック一台分もの容量のある機材を陣頭指揮して、撮影に挑んだのである。1992年から京都に伝わる祭祀を撮影・記録し続け、その時に生み出された作品が、『葵祭』（フジテレビジョン・関西テレビ／1993年）や『祇園祭』（フジテレビジョン・関西テレビ／1994年）といった佳作である。日本人の魂である伝統芸能を記録することを通じて、日本人の精神性と叡智を後世に映像として残すことに、大重は大きな使命感を抱くようになった。

一方で、大重が最も得意とした「自然の気配をフィルムに写す」という行為は続けられ、ハイビジョンカメラを使って自然遺産を記録していった。1991年には『水の心』を手がけ、ヒマラヤやインド、バリ島の水や風の流れを記録していった。人々が信仰する水の女神サラスヴァティーの気配を、自然と人が交歓する日常信仰を通じて描いたのである。大重は自然を捉える手法として「水」と「光」という対象をクローズアップするようになり、翌92年には、フジテレビジョンと関西テレビ放送がスポンサーとなって、『水の光』『風の光』（フジテレビジョン・関西テレビ／1992年）という二部作をハイビジョン実験放送用に発表した。さらに日本ナショナル・トラスト協会からの依頼を受け、日本各地の自然遺産を記録したドキュメンタリー映画を製作した。この映画の題名は、大重自身が悩みぬき、その結果、想いついたタイトルが『未来の子供たちへ』であった。自然遺産のような自然本来の姿は、未来の子供たちへと継承していかなければならない……といった大重の強い想いを伺い見ることができよう。

1995年、未曾有の犠牲者を出した「阪神淡路大震災」に遭遇し、その惨状を目の当たりにし、身をもって体験した。そこで得た経験から、自然に対する畏敬の念が益々深まり、映画作りへの意欲を燃やす

こととなる。その直後、『PANARI』の制作で頓挫していた編集作業を進めた。ついに1995年の末には完成し、自然と人間のかかわりを描いた沖縄二部作、『光の島』『風の島』として全国上映されることとなった。この二部作は、自然の気配を写しこむ映画監督、すなわち「気配の魔術師」として評される切掛けとなったフィルムであり、大重の映像手法が凝縮されていると言える。大重作品は、沖縄の自然をテーマとした『光りの島』を皮切りに、自然の中における人間の立ち位置を、常に自然の側から問いかける作品を作り続けることになった。

震災経験をして以来、大重は何かには駆り立てられているように、社会的運動にも積極的に関わる事となる。例えば、1997年、述べ人数二万人を動員した平和イベント「神戸からの祈り」を鎌田東二（宗教学者）や喜納昌吉（音楽家）らと共に、震災を経験していた者たちを集め、このイベントに深く関わっている。続いて、精力的に「古層三部作」と呼ばれる『縄文』・『ビックマウンテンへの道』（The Long Walk for BIG MOUNTAIN）・『魂の原郷ニライカナイへ』を完成させた。人々の点と点のつながりが、古層三部作を後押しする文化人たちを引き寄せ、梅原猛の思想に感化された『縄文』（福井県三方町縄文博物館／2000年）や、山尾三省が朗読をした『ビックマウンテンへの道』（自主映画／2001年）、比嘉康雄の遺言を記録した『魂の原郷ニライカナイへ～比嘉康雄の魂～』（自主映画／2001年）などが誕生していったのである。その中でも、『魂の原郷ニライカナイへ』は、大重の映画人生に大きな影響を与えることになった。

5、2000年代の軌跡

2000年、大重の映画人生に転機が訪れる。その契機は、沖縄の聖地・久高島（沖縄県南城市）に住む人々を撮り続けてきた写真家、比嘉康雄からの撮影の依頼であった。末期ガンであった比嘉の「死を迎える前に残したいメッセージがあるので収録してほしい」という言葉に、大重は突き動かされ、すぐに沖縄に飛んで撮影することになった。収録して二週間後、比嘉康雄の魂は「原郷のニライカナイ」へと旅立っていった。

比嘉の遺志を受けとめ、2001年には、記録映画『魂の原郷ニライカナイへ～比嘉康雄の魂～』を完成させた。その作品の評価は高く、大重映画の中でも最高傑作であると言われている。一方で、「ヤマトンチュ」（日本本土出身者）である大重が、比嘉康雄というカリスマ的写真家の最期を記録したということで、一部の知識人から批判的な意見もあった。つまり、「ヤマトンチュ」が「ウチナーンチュ」（沖縄人）から文化的搾取するという典型例として捉えられたのであった。偏狭なポストコロニアル思想に毒された知識人が予先を向けたわけである。しかしながら、比嘉康雄が大重にフィルムを回させた動機は、「自分の言霊を後世に広く伝えたい」という純粋な思いではあるまいか。つまり、比嘉は、沖縄の古層に見つけ出した「人類の祖型」について記録してもらえば、「沖縄の特殊性」を見据えて「人類の普遍性」へと繋げるのできる人間に頼みたい……と切望したと考えた方がよからう。

2002年、大重は、比嘉康雄の遺志を受け継いで、沖縄の古層を記録することを決め、沖縄に移り住むことにした。琉球弧の基層文化を記録撮影することに、集中したいと考えたからであった。まずは那覇市に拠点を構え、制作活動のために、「NPO法人沖縄映像文化研究所」を設立して理事長に就任した。「神の島」と呼ばれる久高島を記録するために、長篇記録映画『久高オデッセイ』の企画を立ち上げて支援者を募り、聖なる島の人々の生活をドキュメントする準備を整えた。その島を12年間にわたって記録する『久高オデッセイ』（三部作構成）は、まさに大重映画の到達点を目指したものであり、海に生きる人々に寄り添ってきた映画人生の終焉地として相応しいものであった。他方で、奈良県の大台ヶ原の四季の変遷を捉えた『大台ヶ原 気と水』（環境省・奈良県／2002年）を制作し、沖縄に拠点を移しても、日本の自然と文化を記録するという活動を続けた。そして、かつての盟友でもあり、沖縄物産企業連合を立ち上げたばかりの宮城弘岩からの支援を受け、「ちゅらビデオシリーズ」三部作である『居眠り市場』『山原の夏』『神々の島の現在』の制作に取り組んだ。『神々の島の現在』は『久高オデッセイ』の久高島のロケ撮影の先駆けとなり、また『山原の夏』は大重が作品化したいと渴望している記録映画『森の気～ヤンバルの小宇宙～』の構想の一部となっている。

2003年、ベルリン国際映画祭に『小川プロ訪問記』（博報堂／1981年）が正式招待され、大重作品に

対する評価も高まっていった。2004年、沖縄県より「美ら島大使」の任命を受け、沖縄と日本本土の架け橋となるべく、映画制作を沖縄にこだわって続けることに集中する。しかし、2004年10月に脳出血に倒れ、右半身の自由が利かなくなる。大重は、『久高オデッセイ』の当初の構想は四部作の予定であった計画を、三部作として構成しなおした。比嘉康雄の遺志を受け継いだという使命感から、激痛を耐え抜き、リハビリを受けながら、2006年に第一部をついに完成させた。2007年2月には、『久高オデッセイ』は那覇市の桜坂劇場で一般公開され、ドキュメンタリー分野では異例の観客動員数を記録した。その後の大重は、『久高オデッセイ』の続編の撮影に入り、2014年まで記録の旅を続け、映画人生の「終焉の地」へと歩み続けている。

6、日本の宗教学への影響

大重潤一郎という「ドキュメンタリー映画の奇才」の映画人生を俯瞰することで、彼の生きざまが作品の思想的な系譜に反映されていったことがわかっていく。その遍歴を踏まえば、大重潤一郎という存在は、現代にあって野生の息吹そのままに生きている自然人であり、だからこそ、自然の繊細さ・美しさ・力強さを描くことにかけては、類稀なる才能の持ち主であると言えまいか。その影響は、宗教学や文化人類学などの学术界にも大きな影響を与え始めている。例えば、宗教学者の鎌田東二は、大重を「気配の魔術師」と呼び、人類の古層を感覚的に捉えた作品群を評価している。また、宗教学の碩学である島藺進氏が中心となって、第19回国際宗教学・宗教史会議において、大重作品の上映に協力し、日本人の精神史を振り返る上での重要性を示唆している。日本国内で有数の宗教紙「中外日報」に取り上げられるなど、その注目度もカルト的に高まっている。

重要なのは、見えない気配や精神性というテーマを扱いつつも、宗教関係者やスピリチュアルに関心のある人々だけでなく、宗教的な事象に関心のないオーディエンスからの支持が根強いことである。それは、現代人に神話的モチーフを呼び起こさせ、「生きるよすが」のための哲学的映像として機能している証であると言えまいか。大重自身、人間の精神的活動について触れる際に、「宗教的な営み」と「日常信仰的な営み」を区別して考え、ドキュメンタリー映画に込める思想性を普遍的なものに昇華しようとしている。つまり、人間本来の文化的な営みとしての「日常信仰」や「自然信仰」は、自然と人が共生する環境においては、自然に対して「感謝」や「祈り」を重んじる人々の姿があるのは当然だからである。大重の眼差しは、自然の流れに身をまかせる自身の映画人生を反映するかのようになり、人間が自然に必死に身をまかせながら生きぬく様相に向けられていると言えまいか。

